

「お母さん！」

娘の発するこのひとりで、たとえようのない幸福感に包まれる瞬間、神野美咲（かのみさき）は6畳間に置かれたベッドの上でいつも目を覚ます。

夢……。それは今まさに見ていた「夢」であり、美咲が小さい頃から抱いてきた「夢」でもある。

4LDKの庭付き一軒家と二人の娘に囲まれて暮らす、慎ましくも温かい家庭。それが、取り立てて特技も目標もなかった少女時代の美咲の唯一と言っていい夢だった。その夢は、大学生になり、社会人となり、それなりに人生を生きても変わることはなかった。そして、その夢は、手を伸ばせば届くところまで来ていたはずだった。

なのに、どこで、どこから躓いてしまったのだろうか。こんな日々の繰り返しは、この先いつまで続くんだろう。

現実に1ミリも触れていたくない美咲は、もう一度夢の世界に戻ろうとするが、頭の中をぐるぐる回りだしたもう一人の自分が、美咲の眠りを妨げる。

1

その年、美咲は25歳になっていた。中堅広告代理店の営業担当として、平日は社内外をそれこそ飛び回り、土日は恋人との時間を楽しむ、どこにでもいるような都内のOLだ。

地元である北海道の高校を出た美咲は、進路として都内の女子大を選んだ。持病を持っている父・健一と、これまた体があまり丈夫ではない母・真知子の負担や気持ちを汲んで、道内の大学に進むことも考えたが、「このまま北海道にいたら、一度は東京で生活してみたいという想いはきつと叶えられない」と思い、その時点では偏差値が10以上足りていない大学を志望校に据え、高3の春に両親にこう切り出した。

「ねえ、私、東神女子大に行きたいんだけど、受験してもいいかな？」

健一と真知子はお互いに顔を見合わせ、そして真知子はこう返した。

「みいちゃん、東神ってあの東京にある有名な女子大のことだよな？ こう言っちゃなんだけど、みいちゃんの今の学力だとちょっと厳しいんじゃないかしら？」

「そうなんだよね、このままだとキツイと思う。だけど、目標は高くっていつもお父さん、言ってるでしょ。だから私もせめて高い目標を持って一年間頑張ってみたいなと思って」

「美咲、ようやく俺の言ってきたことが分かってきたか。そう、どうせやるなら目標は高くだ。ちなみに、その東神というところは今の美咲にとってどのくらい難しいんだ？」

「うーん、偏差値的に10から15くらいは足りない感じかな。あと、私英語が苦手だから、そこはかなり強化しないとまずいかも」

「よし、いいじゃないか。何事もチャレンジだ。もし一発で合格したら、東京で一人暮らしをさせてやるから、頑張ってみろ」

健一は、昔から「目標は高く持て」と二人の娘に伝えていた。かつて高校野球で甲子園まであと一歩のところまで登りつめたという自信と悔恨が、健一のその後の原動力になっていたようだ。大学まで野球を続け、今は地元の電力会社に部長職として勤めている。美咲が中学生の頃から持病のためあまり体を激しく動かせなくなり、今は野球とは距離を置いている。そんな健一にとって、娘の発奮は想像以上に嬉しかった。

「そうね、みいちゃんと離れて暮らすことになるのは悲しいけど、みいちゃんが頑張る姿を見たいから、私も応援するわ」

眞知子は、健一に反対したい気持ちを抑えながら、言葉を絞り出した。

これまで眞知子は、結婚以来、常に健一の希望に合わせて生活をしてきた。

街の中心の近くで暮らしたいと思っていたが、「俺の実家に近いところに家を買う」と一方的に決めた健一に、専業主婦をしていた眞知子は反論できなかった。

美咲と妹のさやかはまだ幼子のとき、本当は土日くらい家事を手伝ってほしかったが、少年野球のコーチに出かける健一を黙って見送った。

子どもたちの進路をめぐる、女子高がいいか共学がいいか話し合いを持ったことがあった。眞知子は共学出身だったため、「異性がいれば楽しいんじゃないかしら？」と提案したが、健一は「おい、何言ってるんだ。美咲とさやかに変な虫がついたらどうするんだ。二人は女子高に行かせるに決まってるだろ」と議論にすらならなかった。

美咲は頑張った。人生でこれほど頑張ったことはなかった。とにかく東京に行きたい。それだけを目標に机にかじりついた。その努力と引き換えに手に入れたのが、東神女子大の合格通知だった。

家族四人で美咲がこれから暮らすマンションで引っ越し作業をしていたとき、さやかがお姉ちゃんに言った。

「お姉ちゃんいいなー。私も頑張って再来年東神女子大受けようかな」

しかし、さやかは気づけば地元の私立大学にあっさり推薦合格した。

そして、昨年の春、父のコネで電力会社の関連会社に入社した。最近、同期入社男性と交際を始めている。

美咲にも、大学時代から付き合い合っている彼氏・孝太郎がいた。大学2年から付き合い合っているからこれ6年の付き合いになる。出会いは、サークルだった。美咲は女子大に通っていたので、クラスが同じ絵里奈に誘われて男子もいる外部のテニスサークルに所属していた。

そこで副部長を務めていたのが孝太郎だった。色黒で体格も良く、均整の取れた顔立ちの孝太郎は、社交的な性格もあり、人望があった。美咲が1年生の頃は、それほど仲良くなかったが、2年生になり、1学年上の孝太郎が副部長になったあたりから、いろいろと相談を受けるようになり、親密になっていった。

夏の飲み会で、二次会に参加していた二人は、トイレで偶然鉢合わせし、そのとき孝太郎が美咲に声をかけた。

「みんな酔っ払ってるし、二人して抜け出さない？」

美咲は戸惑いながらも、酔いの勢いに任せて頷いた。

そして、スキを見てまずは孝太郎が鞆を手に席を立ち、5分ほど時間を置いて、美咲も「ちょっとトイレ」と言って席を立った。大きなテニスバッグを手にトイレに行くなんて馬鹿げているが、要はみんなそのくらい酔っ払っていたというわけだ。

「孝太郎さん、副部長なのに平気なんですか？」

さして心配してなさそうな声で美咲が叫ぶ。

「平気、平気。もう誰が残ってるか把握してるヤツいないだろ。それよりこの後、どうする？」

「えっ、どこか行くあてあったんじゃないんですか？」

「いや、何も。ただ美咲ちゃんともうちよつと一緒にいたいなーと思っただけ」

そんなことを言われたのは初めてだった。確かに美咲も孝太郎のことをカッコいい先輩だとは思っていた。ただ、孝太郎は他の女子にも人気があったし、奥手な美咲は自分から告白したことなど一度もなかった。

高校3年生のときと大学1年のときにそれぞれ彼氏らしき男はいた。でも、その男たちはいずれも自分から告白しておきながら、自分から美咲のもとを去っていった。

理由はだいたい察しがついている。美咲はノーと言えない性格なのだ。

色白でハッキリとした顔立ちの美咲は、一見モテそうな外見ではあるものの、自分から男子と仲良くするタイプでもなければ、社交的な方でもない。合コンも、友だちに誘われて、数回程度しか行ったことがない。

それでも、あまり目立たずに座っているため、男子にとって面白みに欠けるのだろう。だから、告白されたら断れないし、飽きて捨てられてもノーと言えない。

孝太郎と親密になり始めていたのは、そんな自分を変えようとしていた時期だった。自分からもっと積極的にならなきゃ、と思っていたからこそ、酔いの勢いがあったとはいえ、こうして孝太郎と抜け出すことができた。

そして、その孝太郎から、告白とも言える言葉をかけられた。

「そしたら、カラオケでも行きましようか？」

初めて自分から誘った。そして、3巡目に大塚愛の『さくらんぼ』を歌っているとき、ふいに孝太郎に唇を奪われ、そのまま抱き合った。

「俺、美咲ちゃんのこと、好きかもしれない」

美咲は、孝太郎の気持ちを受け入れた。

それからは、サークルでは周囲に気づかれることなくこれまで通り接し、その分、サークル活動のないときは、孝太郎が美咲のマンションに来るようになった。

数ヶ月もすると、孝太郎のマイ歯ブラシやマイパジャマが美咲の部屋を埋めていくようになった。

美咲は、孝太郎のいない部屋で、彼が忘れていった腕時計を手でクルクル回しながら、「私、この人と結婚することになるかも……」と小さな頃から描いていた夢に思いを馳せていた。そんな時間がたまらなく愛おしかった。

大学卒業後、孝太郎は、第一志望の大手住宅販売会社に就職し、持ち前のコミュニケーション力を活かして、営業として一戸建てを売りまくった。一方の美咲は、翌年、企画職希望で入社した中堅の広告代理店で、営業部に配属され、苦しい時期を過ごした。もともと奥手であり、しかも、企画職を希望していたこともあり、営業にはなかなか身が入らなかった。そんな人材が活躍できるはずもなく、同期入社5人のうち、最も営業成績が低い状態が3年間続いた。その間、美咲を支えたのは、孝太郎の存在と、孝太郎との間で叶える長年の夢だけだった。

孝太郎は、時折、自分が販売した一戸建てを見に連れて行ってくれた。

「こんな家はどう？」

「この壁の色かわいいね。庭もついてて車も2台置けるんだ」

「さすがに都内だとここまで広い家は難しいけど、ちょっと都心を離れば、同じ金額でも一回りも二回りも広い家が持てるんだ。それに、うちの住宅なら、いろいろと優遇してもらえるしね」

「そうなんだ。楽しみだな、そういうの」

「あと2年この調子で頑張れば、今の主任職から営業マネージャー職になれるはずだから、そうになったらすぐにでも家を買おうよ」

これ、プロポーズと受け取っていいんだよね、美咲はもう一人の自分に問いかけた。孝太郎に聞く勇気はなかった。でも、それだけで十分だった。

2年後、美咲は結婚して、新居に住んでいる……はずだった。

「あれっ、こんなところにこんなあったっけ？」

美咲が胸の異変に気がついたのは、少しずつ肌寒さが身に染みるようになってきた紅葉の時期のことだった。

いつものように勤務先に向かうため着替えをしているとき、ブラジャーを付ける際に胸の形を整えるために内側に寄せていた手に小さな突起物が触れた。

しかし、このとき美咲は、この突起物に特に意識を払うことなく、着替えを続けた。

この日は、朝一番から営業会議があり、その発表のことで頭がいっぱいだったのだ。

4年目でようやく万年最下位から抜け出し、受注の喜びやお客様から感謝される快感を味わえるようになってきた。

専業主婦として家庭に入ることを夢見ていたが、共働きも悪くないかも……と思い始めていた。実際、会社の同期ともうすぐ結婚を控えている絵里奈は、これからも働き続けるのだという。

「やっぱり、自分のキャリアは、結婚しても子どもが産まれても大切にしたいしね。主婦として、家族のためだけに生きるなんて私には無理」

「そうなんだー。私も小さい頃はお母さんみたいに専業主婦が当たり前と思っていたけど、仕事も家庭も両立できる時代だもんね」

「そうだよ。最近美咲、仕事の調子いいみたいだし、何より美咲ラブの孝太郎くんならそのへん絶対理解してくれるよ」

「有り難う。ところで、絵里奈は新婚旅行はどこに行くの？」

「本当はヨーロッパに2週間くらい行きたかったんだけど、お互いに仕事の調整ができなかったから、ハワイに1週間」

「そっか。でも、ハワイでも十分楽しそう。いつかうちの家族とも一緒に行こうよ」

「そうだね。じゃあ、そのときのために、いろいろ良い店開拓しとくね」

絵里奈とのカフェでのこんなやり取りを思い出しながら、美咲は満員電車から吐き出され、オフィス街へと向かう流れに身を投じた。

孝太郎は、はやる気持ちを抑えきれなかった。

27歳の主任職として、そして営業部の若きエースとして、実績を上げ続けていたことが評価され、一年前倒しで営業マネージャーに推薦してもらえることになったのだ。

最終的には、会社の判断やバランスの問題になってくるが、少なくとも上司からの信頼を勝ち得た自信は、揺るぎないものになっていた。

この事実を、早く美咲に伝えたい。もし昇進が一年早くなれば、その分、結婚や新居のこともそれだけ早く進められる。

美咲の喜ぶ顔が目に見えかぶ。

同級生の絵里奈からもいろいろと結婚のことを聞かされているだろうから、まだ20代とはいえ、焦りもあるだろう。

早く美咲を安心させてあげたい。でも、やっぱり、きちんと決まっただけのほうがいいか。もし万が一のことがあって今年駄目だったら落ち込むだろうしな。

帰りの電車で揺られながら孝太郎は、そんなシミュレーションを繰り返して、一日様子を見ることに決めた。

確実に昇進が決まる3月までもう少し様子を見よう。そして、確実な手土産とともに改めてプロポーズしよう。

年が明け、テレビや街が正月気分には浮かれる中、26歳になった美咲の心は晴れなかった。

数ヶ月前に気づいたしこりが大きくなってきている気がするのだ。年末あたりから気になりだし、ずっと触っているうちに、どんどん頭の中をしこりが占めるようになっていった。

正月休みに会った絵里奈と瞳にも、軽い雰囲気打ち明けたものの、「うちらまだ若いし、思い過ぎだよ」と一蹴された。

そうだ。まだ20代だし、何よりもこれから孝太郎と家庭を築き、営業の仕事も頑張らなきゃいけない。

こんなことで歩みを止めちゃいけない。そう気を取り直し、美咲は病院に行くこともしなかった。痛みがないこともその理由の一つだった。

こうして2月が過ぎ、3月になり、とある土曜日のデートの夜、美咲は孝太郎から昇進の報告と、プロポーズを同時に受けた。幸せの絶頂に、美咲はこのとき確かに登りつめた。

まずは両親との顔合わせ、そして結婚式の準備。新婚旅行はどこにしようか。さらには、新居も……。来年くらいには子どももできているかなあ。

最近の美咲は、このように幸せのループを何周も回っている。

5年目を迎えた会社でも、新人2名をまとめるリーダー的役割を与えられ、公私ともに充実していた。

しかし、幸せを感じれば感じるほど、その背後に忍び寄る暗い影の存在が無視できなくなってきた。

胸のしこり。最近では怖くて、ブラジャーをつけるときも意図的に触れないようにしていた。

もしこのしこりが悪いものだとしたら、今の幸せがすべて奪われてしまう。だから、どうか私のもとからそっといなくなつて……。そう願って、たまに部位に軽く触れるも、やはりその強情な塊はそこに揺るぎない物体として存在し続ける。

幸せと暗い影の間で美咲の心が揺れ動き始めた。

「そうしたら、この指輪もらえますか。サイズは9号で」

婚約指輪ですね？と清潔感のある女性店員に聞かれ、孝太郎は照れくさそうに頷いた。

美咲は特に指輪のことを言っただけなのに、孝太郎は自分で指輪を選び、サプライズしよう決めていた。

昔から婚約指輪は給料の3ヶ月分などと言われているが、昇進も果たし、結婚後も共働きをしたいと美咲が望んだこともあり、少々奮発した。

そして、5月のある週、結婚式場の下見として、都内のホテルで打ち合わせを終え、そのホテルの計らいでもらったディナー券で夕食をともししているとき、孝太郎は美咲に指輪をそっと手渡した。

「美咲、確か9号で良かったよね？」

本当は、「これ、婚約指輪。もらってほしい」と伝えるつもりだったが、恥ずかしくなり、言葉を変えた。

でも、美咲にはそれで十分だった。

「えっ!? 付けてみてもいいの？」

「もちろん。サイズ合うといいけど」

左手の薬指にそっとその輪っかを通していくと、測ったように美咲の指の付け根に指輪は収まった。

「見て、ピッタリだよ。ダイヤも素敵」

「良かった。もし気に入らなかつたらどうしようかとヒヤヒヤしてた」

「そんなことあるはずないよ。孝太郎くんが選んでくれたものなんだから嬉しいよ」

「俺たち、幸せになろうな」

一瞬、美咲の頭に暗い影がちらついた。それを悟られないよう、急いで唇を動かした。

「うん」

孝太郎は、美咲の一瞬の間に、気がついていて。でも、それを恥ずかしがり屋な美咲の可愛い仕草の一つとしか捉えていなかった。

「はい、ジーンとしていてくださいね。すぐに終わりますから」

看護師さんに言われるがままに、機械に乳房を挟まれる。ジーンと言われても、なかなかの痛みを感じる。

でも、大丈夫。これは、結婚式を控えた私の、健康を証明するための儀式なのだ。美咲は自分にそう言い聞かせ、痛みをぐっと堪える。

暗い影の恐怖が日に日に押し迫ってくることに、美咲はついに耐えられず、総合病院で乳がん検査を受けることを決意した。

もちろん、何もなければだし、仮にこれがしこりであっても良性に違いない。

だとしたら、その潔白を証明し、晴れ晴れと幸せの道を進んでいこう。

そう決意して臨んだ検査だったが、触診、エコー検査、マンモグラフィ検査と進むにつれ、不安がどんどん高まっていく。

やっぱり何かあるのだろうか……。

結果は一週間後に聞きに来ることになった。

この一週間は、何を考え、何をしていたのかよく覚えていない。もしかして、いや、大丈夫。でも、もしかして……と頭の中で、不安が渦巻き続けていた。

孝太郎にも事前に伝えようと思ったが、その勇気はなかった。幸せが崩れるような気がしたからだ。

検査の結果が何もなければ、何事もなく、孝太郎と結婚できるんだ。
美咲を支えていたのはその希望だけだった。

そして翌週、勤務先には、生理痛で病院に行きますと嘘をつき、検査結果を聞きに行った。

診察室の前で、名前を呼ばれるのを待っている間、体が震え、手のひらが汗でびっしょりになった。

落ち着け、大丈夫。私には孝太郎がいるんだし。結婚するんだし。大丈夫、大丈夫……。

「神野美咲さん、診察室2番にお入りください」

ビクッと美咲の体が反応した。ついに来た。この先に待ち受けているのは、果たしてどっちだ……。

「失礼します」

「どうぞ」

ドアをノックして診察室に入ると、そこには若い男性の先生が少しうつむいた表情で椅子に座っていた。

美咲は息を呑む。

「神野美咲さんですね……」

「はい」

先生が一瞬間を置いてから、切り出した。

「先日の検査結果ですが、確かにしこりはあるようなのですが、ちょっとまだこの前の検査だけでは何とも言えません。この後、組織を取ってもう一度検査をさせてもらってもいいでしょうか」

「あつ、はい。でも、分からないということは、良性という可能性もあるということですか？」

「まだ何とも言えないのですが、とにかくもう一度検査をしてはつきりさせましょう」

「……分かりました。よろしく願います」

まな板の上の鯉のようだ、と美咲は感じた。

ここに来るたびに気持ち振り回される。

でももういいや。とにかくこんな中途半端な状況から解放されたい。

美咲は、先生に促されるままに、診察室を出て、プリントに記載されている検査室に向かった。

次の検査は組織診と言われ、組織を取ってしこりが良性か悪性かを調べるといふ。

これもまた一週間後に結果を聞きに来ることになった。

そして、一週間後。

「今度は風邪で病院？　せっかくリーダーに抜擢したんだから、もうちょっと意識高く持ってくれないと困るよ」

前日、課長の吉田から嫌味を言われながらも、いつもの総合病院に向かった。

今度こそ、白黒はつきりつくはずだ。

でも、急いで来るようにとも言われなかったし、なんとなく良性なんじゃないかと、美咲は努めて楽観的に振る舞おうとした。

今もまだ孝太郎には何も話せていない。

週末にはデートもしているのに、その件には一切触れられなかった。それはそうだろう、孝太郎は、2つの式場のうちどちらが美咲に相応しいかと、喜々として語ってくるのだから。そんな雰囲気をおち壊すようなことはとても美咲の口からは言えなかった。でも、もし病院で「悪性」と言われたら、この幸せは結局は壊されてしまう。

今の美咲にとってそれは死刑宣告と言っても過言ではなかった。

いつもの診察室の前に着いた。前回同様、手のひらが汗でこれでもかというほど濡れている。毎週毎週、こんな不安の繰り返し。いったい自分が何をしたというのだろう。人に迷惑をかけずに生きてきたつもりなのに、神様はなんでこんなイタズラをするんだろう。そして、こんなイタズラは、今日までにしてほしい。美咲は強くそう願った。

そして、20分ほど経った頃、名前を呼ばれた。すぐには立てず、椅子に腰が落ちた。力が入らない。何か体が自分のものではないようだ。

それでもなんとか、壁に手をつきながら、立ち上がり、診察室の扉をノックした。

「お入りください」

先生の声が一段と低く無機質に感じられた。

あっ、これダメなやつだ……。美咲は直感でそう悟った。

「失礼します」

そう言って、促された椅子に腰を掛けるやいなや、先生はこう言った。

「神野さん、落ち着いて聞いてくださいね。いいですか……。今回の組織診の結果、やはりしこりは悪性の腫瘍でした。つまりがんです。これから乳がんだけで留まっているのか、他の部位にも転移しているのかを調べていきます。ただ、すでに2センチを超えているようなので、いずれにしても手術はせざるを得ないかと考えています」

目の前が真っ暗になり、途中から先生が何を言っているのかよく分からなくなってきた。私が乳がん？ 何それ？ 私、これから結婚して子ども産むんだけど。仕事だつてリーダーになったし、病気になる場合じゃないんだけど。っていうか、孝太郎になんて言えばいいの。結婚式場だつて、候補を2つに絞り込んでもうすぐ決まりそうなのに……。

「神野さん、大丈夫ですか？」

先生は美咲を呼ぶと、さらに詳しい検査をするための日程を提示してきた。思考停止した頭で判断するには難しく、先生の言うままに書類を受け取って診察室の外に出た。

椅子にもたれ、5分ほど経過した頃だろうか。「手術」というワードが頭を駆け巡った。それつてつまりは、乳房を切除するってこと？ 乳房がなくなったら、ウェディングドレスはどうなっちゃうの？

美咲の頭はぐちゃぐちゃになってきた。

もう何から考えたらいいか分からない。

そこに、さっき先生と一緒にいた看護師の女性が近づいてきた。

「神野さん、大丈夫ですか？ 急なことで驚きましたよね。でも最近は医療も進歩しているので、治療をすれば回復だって目指せると思います。だから、気を取り直して、検査行ってもらえませんか？」

先生とは違って、優しい口調で語りかけてくる看護師の言葉に、思わず涙腺が緩んだ。そして緩んだと思ったら、涙が自然と溢れ出してきた。

「すみません、まさかこんなことになるなんて思っていなかったのです……。誰にも伝えていません。この先どうしたらいいのか……」

「大丈夫ですよ。まずは最後まで検査をして、その後、またみんなで一緒に考えましょう」

他の患者さんの対応で忙しいはずの看護師が話しかけてくれたことで、美咲はなんとか持ち直し、次の検査の予約に向かった。

次の検査は、転移がないかどうか、CTとMRIという機械で全身を調べるのだそうだ。あまり日数を空けたくないので、次の日になんとか予約を入れてもらった。

課長にはなんて言おうか。本当のことを言うべきか。でも、そうならリーダーを外されるかもしれない。勇気が出ない美咲は、結局、「風邪で2〜3日の静養が必要になったから、明日も休ませてほしい」と嘘をついた。

そして、翌日の検査の結果、美咲には、「乳がんおよび周囲のリンパ節への転移」という診断がくだされた。と同時に、美咲には非情ともいえる治療方法が提示された。

左乳房の完全切除と、抗がん剤による治療。

孝太郎、助けて。

美咲は、天を仰いだ。

孝太郎は悩んでいた。結婚式場の手配や親同士の顔合わせの日程調整など、結婚に向けて着々と準備は進んでいるのに、どういうわけか美咲の様子が少しおかしい。

美咲にとって自分との結婚は、望んでいた未来ではなかったのか。それとも、他に好きな男ができたとか。明確な原因が特定できぬまま、かといって聞き出す勇気もないまま、1ヶ月以上が過ぎた。

でも、このままでは自分も先に進めないし、美咲にとって本意でないなら、進めるべきでもない。

次に会ったときにこそ、ハッキリさせよう。そう心に決めた。

翌週の土曜日、美咲と孝太郎は、行きつけの新宿の居酒屋で落ち合った。結婚式場の候補を2箇所絞り込んだものの決定打が出ない中、いずれかにお断りの連絡を入れなければならぬ期日が迫っていた。

「で、お金のことは置いて、結局のところ美咲はどっちがいいと思うの？」

「うーん、私は本当にどっちでもいいんだ。孝太郎くん決めていいよ」

「どっちでもいいって、女性にとって晴れの舞台なんだから、美咲の意見を尊重したいんだよ」

「本当にどっちでもいいんだ」

そのぶっきらぼうな言い方に、孝太郎が反応した。

「なあ、そういう言い方はないんじゃないか？ 結婚式って、双方の親族も来るわけだし、俺たちの結婚の第一歩になるんだから、もつとちゃんと考えたいんだよ。美咲だって、喜んでくれたからこの2つまで絞り込めたのに、なんだかちよつと拍子抜けだな」

「……ごめんね、本当にごめんさい」

声を絞り出すなり、美咲はうつむき、体を震わせ始めた。泣いているのか。なんのために？ 孝太郎は今日こそその理由をハッキリさせようと思った。

「ちよつとここだと落ち着かないから、美咲の家に行こうか」

新宿からタクシーを拾い、美咲の家に向かう30分ほどの時間も、お互いほとんど会話をしなかった。美咲は、ずっと下を向き、時折涙を拭いては、また下を向いた。

孝太郎の頭は、このときもまたぐるぐると回っていた。とても結婚式のことを前に進められる雰囲気じゃないな。それどころか、結婚すら危うい感じだ。でも、もう引き返すわ

けにはいかない。式場の仮押さえ期間は迫っているし、両親だって美咲とのかことを楽しみにしている。事が起きるのであれば早いほうがいい。

タクシーが美咲のマンションに到着した。美咲は泣き疲れたのか、孝太郎の支えを頼りにエントランスに向かった。

そして、孝太郎に鍵を渡し、代わりにエントランスと部屋のドアを開けてもらった。

孝太郎にとって、美咲の部屋に来るのは、約1ヶ月ぶりだ。特にそれまでと変わったところは見られない。やはり、ちょっとしたマリッジブルーみたいなものかな。孝太郎は少し安心した。

寄りかかる美咲をソファに座らせ、冷蔵庫からペットボトルの水を取り出し、美咲の前に置いた。

「落ち着いたら、少し話そう」

そう優しく語りかける孝太郎に、美咲はついに感情を堪えきれなくなり、嗚咽を始めた。そして、「孝太郎くん！」と叫ぶと同時に、孝太郎にしがみついた。

「美咲、どうした？ 大丈夫か？ 俺はここにいるから安心しろよ、な」

孝太郎が優しく語りかければかけるほど、美咲の嗚咽は大きくなる。孝太郎は、こんな美咲を初めて見た。そして、どうしても美咲がここまで取り乱す原因を知りたくなった。

10分ほど泣き続けただろうか。美咲は、いよいよ「あのこと」を孝太郎に告げる決心をした。今日は絶対に伝えなきゃいけない、と思っていた。でも、伝えた瞬間、孝太郎が自分のもとを離れていってしまう気がして、なかなか決心がつかなかった。そして、離れていってしまうことを想像すると涙が溢れた。もちろん、がんも怖い。宣告を受けてからの数日間も怖くて眠れない日々が続いた。でも、もっと怖いのは、がんによって日常や幸せが失われてしまうことだった。その象徴でもある孝太郎が自分のもとを去ってしまうことが、美咲にとって最も辛いことだった。でも、今日こそ言わないと。美咲は自分を奮立たせる。

「今日のごめんね。こんなじゃ、だめだよね」

「そんなことないよ。マリッジブルーっていうのもあるし、新しい道に進むのは誰でも不安だから」

「そんなじゃないの」

「えっ」

「そんなじゃないんだ。孝太郎くんと進む道は楽しみで仕方ない。でも、もしかして私、一緒には行けないかもしれない」

「どういうこと？ 他に好きなやつでもできたのか？」

「まさか。そんなわけないでしょ。実はね……、実は私……」

言いかけたが、美咲はまた泣き出してしまった。孝太郎はそんな美咲を抱きしめる。孝太郎の優しさが、美咲の体の中にすーっと入ってくる。

「実は私、乳がんなの」

幸太郎の顔を直視しなくて良い体勢だったからか、美咲の口から、言えなかった事実がすっと出てきた。やっと言えた美咲は少し安堵した。

一方の孝太郎は、頭が真っ白になった。

そして信じられない気持ちで、「えっ、何？ よく分からない」と美咲に聞き返した。

「だから、私、乳がなんだったって……」

「……乳がなんて。なんで美咲が……」

「そんなの、私だって分からない。去年くらいから胸にちよつとしこりみたくのあるのは気づいていたんだけど、そのときはまだ全然気にしてなかった。でも、孝太郎くんと結婚話を進めていくためには、ちゃんと調べておいたほうがいいなと思って、検査を受ける行ったの。そうしたら、たくさん検査受けることになって、たくさんたくさん受けることになって……」

美咲の頬から涙がとめどなく溢れ、孝太郎のブルーのシャツの肩口を濡らす。孝太郎は、そんな美咲の不安を閉じ込めるかのように、一層強く抱きしめる。

「怖かったんだな。ゴメンな。全然気がつかなくて。大丈夫だよ。びっくりしたけど、大丈夫。俺は美咲のそばにずっといるから。体、しっかり治して、その後にもまた結婚式やろう」

美咲は嬉しかった。がんの疑いを告げられた日から、ずっと不安だったこと。死ぬこと以上に不安だった、孝太郎に捨てられるんじゃないかということ。その不安から解消され、美咲は幸せだった。がんになってしまった自分でもこうして受け止めてくれる孝太郎の存在に、言い知れぬ幸福感を感じていた。

孝太郎にすべてを告げた翌日、美咲は、いつもの病院に向かった。今後の治療スケジュールと細かい内容を聞きに行くためだ。

乳房を切除し、抗がん剤を使って治療することは分かった。しかし、それによってどれくらいの期間、治療に専念しなければならぬのか。

会社はどのくらい休まなければならないのか。

そういう見通しを聞き、その上で孝太郎と結婚式の延期の話をするようになっていた。

しかし、昨日の幸福感が嘘のように、先生から出てきた言葉は、美咲にとって重たい現実だった。

まず、手術のために2週間ほど入院する。その後、間をあけずに再発防止のための抗がん剤治療に入る。通院でできる治療ではあるものの、副作用も強く出てくる可能性があるため、勤務しながらだと何かと不安はあるらしい。

そうなれば、当然今から半年間は、結婚式どころではないだろう。しかも、こうした治療をやり切ったとしても、治療がうまくいくという保証はないとのこと。病院は、「絶対治る」とは言ってくれないものらしい。

また、全額自費ではあるものの、乳房再建という方法も加えることはできるらしい。切除したままだと片方の胸だけまな板のように真っ平らになってしまったため、もう片方と同じような膨らみに戻すことができるとのこと。しかし、それなりの金額がかかることもあり、今はまだ再建にまで頭が回らない。ただ、気になることとしては、孝太郎を悲しませてしまうな、ということだ。片方の胸がない女と結婚するなんて……。孝太郎の両親だつて許してくれないかもしれない。

なんで私ばかり……。先生からの説明の後、病院の外に出て、芝生の上にポツンと置かれていたベンチに腰を下ろし、美咲はまたも涙を流した。昨日あれだけ泣いたのだから、涙も枯れ果てたと思ったが、人間の涙はすぐに再生産されるようだ。

とにかく孝太郎に伝えよう。そう思い、メールで手術のことと抗がん剤のこと、そして今後のスケジュールについて伝えた。再建のことは書かなかった。

ずっと携帯を見ていたのか、と思うほど、あつという間に返信が来た。

「美咲のことは俺が守るから、安心して治療に臨んでほしい」と書いてあった。

このひと言葉だけで十分だ。なんとか生きていける。でも、もし孝太郎から見放されたら私はどうなるんだろう……。

治療のスケジュールを聞いた翌日、上司である吉田には意を決して今回のことを伝えた。

インターネットで、がん告知された社員がびっくりして先のことを考えないで退職するという記事を読んだが、美咲は退職するつもりはなかった。

今は孝太郎が支えになってくれてるが、この先何が起こるか分からない。せめて勤務先だけはきちんと抛り所として確保しておきたいと考えていたのだ。

美咲とふた回り近く歳の離れた吉田は、比較的冷静に美咲の言葉を受け止めてくれた。

「そうだったのか。だから最近休みがちだったんだね」

「はい、心配をかけたくなって黙っていて申し訳ありません」

「いや、誰だつて言いたくないよ。しかも、男の上司には特に言いつらいだろう。よく話してくれたね」

「あの、私これからどうなるんでしょうか。2週間の入院の後、抗がん剤治療もやることになっていて、先生はできたら無理はしないほうがいいと言っています……」

「そうだよ。無理はしないほうがいいよ。君がいなくなるのは残念だけど、こちらのことはなんとかなるから。親御さんも君のことが心配だろうから、仕事のことは気にしないで治療に専念して大丈夫だよ」

「有り難うございます。半年ほどで復帰できる見込みですので、また元気になって戻ってきたいと思います」

「えっ、戻ってくるって、ここへ？ ゴメン、ちょっと待って。僕はそんなことひと言も言っていないよ。だって、神野さん、乳がんになっちゃったんですよ。治療したってこの先

どうなるか分からないんだよね。そんな見通しが立たない状態じゃ、こちらも神野さんの穴を埋めようがないじゃない」

「……それってつまり……」

「もし休職して戻ってこようとしていたら申し訳ないけど、うちの課は神野さんより若い子もいるし、何ヶ月も残ったメンバーだけでやっていく余裕はないんだ。言ってること分かるかな？」

「それって退職しろってことでしょうか」

「そうは言っていないよ。そうは言っていないけど、ただ自分がなくなった後のことを考えてほしいだけ。他のメンバーにどんな影響が及ぶか考えほしいんだ」

「それは申し訳ないと思っています。でも、私、ようやく営業としても成果をあげられるようになりましたし……」

「まあ、新卒の頃に比べたらね。でも、他の課にいる同期の遠野や三田と比べてどうかな。この際、言わせてもらうけど、僕は正直もっと成果を出せるメンバーでチームを作りたいんだよ。これまでは神野さんにもなんとか頑張っただけで、サポーターしてきたけど、さすがにがんになったとあってはもし戻ってこられたとしても、今までのようにはいかないだろう。でも、うちは慈善事業じゃない。営業は数字をあげなきゃいけないんだ。せめてそのくらいは理解してもらいたいな」

美咲は言葉を失った。吉田は、私の最近の頑張りを認めてくれていると思っていた。でも、本当は違った。私がいなくなるタイミングをどこかで待っていたんだ。私がいなくなればもっと優秀なメンバーを社内外から引っ張ってきて代わりに入れることができる。

そんな吉田にとって願ってもないチャンスを私が与えてしまったということか……

美咲は必死に涙をこらえた。孝太郎の前では泣いても、こんな上司の前では絶対に涙を見せたくない。

「吉田課長のおっしゃることは分かりました。そうしましたら、人事部に掛け合っていただけないでしょうか。『神野は乳がんになってこの先営業ではやっていけないから、復職後、別の部署に回してあげてほしい』と伝えてもらえないでしょうか」

「なるほど、その手があったか。それなら人事部に掛け合ってみよう。ただ、他部署だつて余裕があるわけじゃないんだし、うまくいくかは分からないよ」

「分かりました」

会議室を出て、脇目もふらずにトイレの個室に入った美咲は、声を殺してむせび泣いた。

「なんで私ばかり……」

今はまだ痛みもないこの体の中の塊のせいで、なんでこんなに辛い思いばかりしなければならぬのか。美咲は自分の運命を呪った。

結局、美咲の件は人事部の方に預けることになり、ひとまず入院期間は通常の有給休暇を使って休むことになった。その後、半年にわたるといわれる抗がん剤治療についてどうなるかは、その間に考えておいてもらえららしい。

あの課長の感じだと、まず営業部に席を残しておいてもらうことは難しそうだ。あとは配置換えか、退職勧奨か。でも、本人がやる気を持っていないのに、退職させるなんて、いくら営利企業とはいえ許される行為なのだろうか。

美咲は、入院前に書店に行き、乳がんの本と合わせて、人事労務の難しそうな本も買い込んだ。なんとしてもしがみついておかなくては……。嫌な予感を振り払うように、家路に急いだ。

「はい、ではここが神野さんのお部屋になります。テレビの音はイヤホンで聞くようにしてくださいね。あとベッドのリモコンは……」

看護師さんが早口で説明してくれているが、美咲の頭には半分くらいしか内容が入ってこない。

病院の個室は最大4人が入れるようになっていて、それぞれが薄い布で仕切られている。本当は個室を使いたかったのだが、追加料金が1万円単位でかかるため諦めた。

美咲が入室する前にすでに二人ほど入っており、一人は50代、もう一人は70代と思いき女性だった。軽く会釈し、奥のあてがわれたベッドへ向かう。

看護師さんの説明はよく耳に入っただけだったが、何かあればこの人たちに聞けばいいだろう。特に、50代の方は美咲が会釈したときに笑顔を返してくれ、良い印象を抱いた。

「神野さん、それでは明日が手術ですので、今日は採血と診察だけになります。安静にしていてくださいね」

そう言って、看護師さんは美咲のもとを離れ、50代の女性に声をかけて出ていった。

70代の女性はいつの間にか眠りに入っていた。

持参していた下着や洗面道具をカバンから出してしていると、50代の女性がおもむろに話しかけてきた。

「はじめまして、私登記子。よろしくね」

「あっ、こちらこそよろしくお願ひします。美咲です」

「美咲ちゃんか。まだ若いわよね。乳がん？」

「はい、まだ26歳なんですけど、リンパ節まで転移しています」

「それは大変ね。私は転移はなかったけど、再発が怖くて乳房切除して、これから抗がん剤とホルモン治療よ」

「乳房切除、怖くなかったですか？」

「そりゃ、怖いわよ。切ったあととは痛みもあるし。でも、これでごんとお別れできれば仕方ないわね。子どもたちも数年後には大学卒業するから、なんとかそこまでは見届けたいし」

「お子さん何人いらっしやるんですか？」

「息子と娘、一人ずつよ。息子はからっきしだけど、娘はよくお見舞いに来てくれる」

「いいですね。私は親には言いましたけど、実家が遠いのと、少し病気がちなのでこっちは来られないんです」

「友だちとか彼氏とかは？」

「友だちにはまだ……。彼氏には伝えましたけど、なんとなく負担かけたくないなって」

「そんなことないわよ。どんどん甘えちゃえばいいのよ。それでも受け止めてくれない彼氏だったら、こっちから捨てちゃえばいいのよ」

「そんな……。私そんなに強くないですから」

「私は乳がんになってショックもあるけど、逆に、気持ちが楽になったこともあるの。この先の人生、やっぱりやりたいことやらないと。これまで、夫のため、子どもたちのためって生きてきたけど、これからは自分のために生きていくわ。あなたも彼氏のことばかりじゃなく、自分のこと大切にね」

「有り難うございます。よろしく願います」

美咲は自分のベッドに戻り、ポーツと天を仰いだ。

登紀子さんか。良い人だけど、ちょっと話すのしんどいな。子どものこととか家族のこととか、この人はある程度やってきたから乳房がなくなってもあんな風に言えるんだろう。

結婚もしておらず、子どももいない自分は、まだ何も手に入れていない。そんな中、あなたの人生大切に、とか言われても……。美咲はベッドに潜り込み、外界との壁を作った。

翌日、美咲は左胸の乳房を失った。

孝太郎は、迷っていた。今日、入院している美咲のところへ行く約束をしている。しかし、乳房を失っているであろう美咲になんと声をかけてよいのか分からない。

本当は昨日も声をかけに行きたかったが、「手術がもっと嫌になるから」と受け入れてもらえなかった。

孝太郎は怖くなっていった。乳房を失った美咲を自分はこれから愛していけないのか。ただか身体の一部だと分かっているても自身の体が無意識に拒否してしまうのではないのか。何より、それを美咲に悟られるのが怖かった。

そして、美咲は口にこそ出さないが、これから抗がん剤をやっていった場合、もしかしたら結婚後の生活に何らか支障をきたしてしまうのではないか。俺たちはちゃんと子どもを授かれるのか。

そんな不安がこのところ孝太郎の頭にこびりついて離れない。病院に入り、入院病棟の受付で、「神野さんと面会をしたいのですが……」と声をかける。看護師の一人が、孝太郎の顔を見やり、「ではここに必要事項をご記入いただけますか」と促す。名前、住所、連絡先と書いていき、次の項目で手が止まる。そこには「患者との関係」とあった。家族ではない。しかも、今のこの揺れ動く気持ちからすると、彼氏とか恋人と書くのも気が引ける。孝太郎は、その欄に「友人」と書いた。そして、なんとなくそんな自分を責めた。

孝太郎は、看護師に病室を案内され、奥の左にある美咲のベッドの仕切りの前に立った。

深呼吸をして、「美咲、俺」と声をかける。

「うん、空けていいよ」

と美咲のか細い声が聞こえてきた。

仕切っていたカーテンを空けると、ベッドに横たわっている美咲の姿が見えた。腕には何本もの管が付いており、点滴がその横で存在感を示している。はっきりとは見えないが、胸のあたりは包帯で巻かれているようだ。

「孝太郎くん、来てくれて有り難う……」

美咲は絞り出すように声を発した。と同時に、美咲の頬を涙がつつた。

「ごめんね、こんなになっちゃって……」

「何言ってるんだよ。手術、よく頑張ったな。辛かったろう」

そう言って、孝太郎は、美咲の頭を優しくなでた。美咲は涙が止まらなくなった。

そんな美咲を見て、さつき「友人」と書いた自分が情けなくなった。やっぱり何があっても俺が美咲を守らなきゃ。そう、何があっても……。

それから約10日間の入院期間、孝太郎はほぼ毎日美咲のところに通った。それがせめぎの罪滅ぼしだと考えたからだ。逆に、美咲に接していないと、自分の心がどこか遠くにいつてしまいうような不安も覚えていた。

退院日は、まもなく7月に入ろうかという梅雨まつただ中の大雨の日だった。

3

退院した美咲は、その日のうちに自宅から人事担当の村山に連絡を入れた。電話を持つ手がまだ動かしにくいのが、この2週間ずっと気になっていたことをハッキリさせるため、力を込めた。

「はい、栄光エージェンシー人事課です」

「あつ、私営業3課の神野ですが、村山さんいらっしゃいますか」

「村山ですね、少々お待ちください」

保留音がいつも以上に長く感じられる。そういえば、診察室で名前を呼ばれるときも長く感じたな、と美咲は遠い昔のことにように、2ヶ月前のことを振り返る。

「お待たせしました、村山です」

「あっ、神野です」

「神野さん、お電話お待ちしていました。体調の方はいかがですか？」

「はい、手術は無事に終わり、まだ痛みはありますが、でもなんとか退院して生活はできそうです。これから少しインターバルを置いて、予定通り抗がん剤治療に入る予定です」

「そうでしたか。手術が無事に終わって何よりです。こちらもあれから、人事課として神野さんのご希望をどのように叶えられるか考えました。今からそのお話をしますが、よろしいでしょうか」

「はい、お願いします」

「まず、前提として、うちの会社には、まだがん罹患しながら働き続けている人がいません。ですので、十分な制度が整っていない、というのが現状です」

「はい」

「また、営業3課の吉田課長に、神野さんのこれまでのお仕事についてもお聞きしましたが、やはり一旦病気が治ったとしても体力や気力が元通りにならない限りは営業の仕事は難しいのではないかとのことでした」

吉田のことだ。美咲を絶対に元に戻させないよう、かなり誇張して村山に伝えたのだろう。

ここまでの話を聞き、美咲は、最悪の事態も覚悟した。

「ただ、会社としては、神野さんのことはもちろん、今後も同じように仕事と治療を両立していこうとされる社員のためにも、できるだけ神野さんのご要望にお応えしたいと思っています」

「えっ」

「これから抗がん剤治療に入られるとのことですが、まずは半年間休職をしてゆっくりと治療に専念してください。そして、治療が終わった後、また我々と話し合いをして、ある程度体が元に戻ったことが確認でき次第、また復職していただきたいと思っています」

「本当ですか？」

「はい。うちの就業規則にも、やむを得ない事情で会社を休職する場合は、1年以内であれば退職させることはできないと書いてありますから。安心してください。ただ、営業をやったかった神野さんのご希望には添えないかもしれませんが……」

「それは大丈夫です。もしここに戻れるなら、自分に見合った仕事を頑張ります。本当に有り難うございます！」

「そう言っていただけで、こちらもホッとしました。それでは、今後の休職の手続きについてお話をしますね……」

美咲は、電話越しにいる村山という男に心から感謝した。課長の吉田は間違いなく自分を退職に追い込もうとしていたが、それを阻止してくれたのだ。営業からは離れるが、吉田のような人間とも離れられるなら、それはそれで良かった。

まだまだ世の中は捨てたものじゃないな、と美咲は疼く左胸にそっと手をやった。

休職の手続きが無事終わり、いよいよ抗がん剤治療に入ることになった。

入院していた病院で、今日は先生の説明を聞くことになっている。来週から毎週通院での治療を行うのだ。

「手術で切除と郭清はしたものの、神野さんの場合はリンパ節にまでがんが転移していったので、再発リスクを下げるために抗がん剤治療を行います。この治療は、倦怠感や吐き気、脱毛、肌荒れなどの副作用が予想されますが、できるだけこちらもさういったものを抑えられるよう調整していきます。長丁場ですが、一緒に頑張っていきましょう」

副作用のことは、入院時に読んだ本に書いてあった。不安ではあったが、これはもう仕方のないことだし、会社は休職しているのだから、辛かったら家で寝ていればいい。

「他に何か質問はありますか？」

そう振られた美咲は、「2点ほどいいでしょうか」と切り出した。

「一つは、乳房再建についてですが、もし希望した場合はやはり抗がん剤治療の後になりますか？」

「そうですね。やはりできるだけ早く抗がん剤治療は進めたいので、再建はそれが落ち着いてからのほうがいいでしょうね。あとは全額自費でやることになるので、ある程度治療費を払い終わったあとに検討してもいいかもしれません」

確か100万近くすると聞いたことがあるし、美咲自身もまだそこまでやる必要があるか決心できていない。ただ、苦しい抗がん剤治療をやりきったあとの希望のようなものが欲しかった。また孝太郎にも相談してみよう。

「神野さん、2つ目の質問は？」

「あつ、すみません。あの、プライベートのことなんですけど、私結婚する予定なんです。本当は今年中に式を挙げる予定だったんですけど、こんなことになったから今は延期になっていて。このまま順調に治療が終わったら、どのくらいの時期に結婚式は挙げられますか？」

「うーん、それは医師の立場からは何とも言えませんね。治療が無事に終われば、それ以降は日常生活に徐々に戻っていきますが、やはり周囲の理解も必要ですから、まずはゆっくりと恋人や両親と話をしてみるのがいいかもしれませんね。それからのこともあるわけですから」

「それから……ですか」

「やっぱり再発リスクがゼロになるわけではないので。それに、この治療をすれば後遺症も出てくるわけですし……」

「後遺症ってなんですか？」

「いや、それは個人差がありますけど、でもまあ、体の機能が変化するリスクは否定できません」

「例えばどのような？」

「そうですね。たとえば、思考力や集中力の低下、物覚えが悪くなるといった症状がもたらされる場合があります。あとは、妊ように性ダメージを及ぼすことも否定できませんね」

「妊ように性、ですか……」

「ええ、つまりは妊娠する力ですね。残念ながら、抗がん剤を投与することでこの力が損なわれる可能性があります」

「……つまり、赤ちゃんが産めなくなるかもしれないってことですか？」

「もちろん、絶対できないというわけではありません。それほどダメージを受けない可能性もあるにはあります。でもそれは後になってみなければ分かりません」

「私、まだ結婚もしていないんですよ。恋人だって子どもを欲しがっているんです。なのに、出産できないかもしれないなんて……」

「神野さん、出産できないのは確かに辛いかもしれませんが、でも、まずはご自身の体が最優先ではないでしょうか。手術が終わったとはいえ、あなたのがんはリンパ節にまで広がっていたんです。もしかしたら微細ながん細胞がまだ残っていて増殖するかもしれない。できるだけ早く抗がん剤治療を行ったほうがいいんです」

「それは分かっています。でも、他に方法はないんでしょうか」

「治療前に卵子を凍結したり、受精卵を凍結したりと妊ように性を温存する方法もあるにはありますが、これもまた自費になります。しかも、それをやることで抗がん剤治療が遅れが生じます。そうなった結果、再発や転移が起こってしまったら、あなた自身がリスクにさらされてしまうんです。分かりますよね？」

美咲はそれ以上言葉が出てこなかった。片側の乳房がなくなっただけでも女性としての価値が下がったように感じているのに、さらには子どもが産めなくなるなんて……。かといって、可能性を残そうとすれば、今度は自分の命が危なくなる。美咲はもうどうしていいか分からなくなった。

「一日だけもらえますか。恋人に話してみます」

「分かりました。でも、とにかく自分の体が最優先ですよ。こちらは予定通り、来週からの治療の準備をしておきますから」

「はい、それでは失礼します」

美咲は診察室のドアを力なく押しあけ、廊下に出た。

そして、孝太郎に短いメールを打った。

美咲からのメールを受け取った孝太郎は、業務中にもかかわらず、内容を見るなり、すぐに返信した。

美咲は、どんなときも診察に立ち会わせてはくれなかった。それは、孝太郎に心配をかけたくない、という気持ちの表れではあったが、それだけではないのではと孝太郎は感じていた。

先生の話す内容が、孝太郎に直接聞かれないことだった場合のことを踏まえて、同席させないのではないかと孝太郎は読んでいた。

そして、いよいよ来週から抗がん剤治療に入る。そのことで今日は先生から何かしら話があったに違いない。もしかしたら、出産が難しくなる、ということ告げられたのかもしれない。

だとしたら、美咲の言葉を俺は受け止められるのだろうか。

美咲のことはもちろん愛している。でも、それとは全く別の感情として、自分は子どもを欲している。住宅販売をしていて、最も嬉しいのは、購入した家に住むことを、お子さんがとても楽しみにしている姿を見ることができた。新しい家の新しい子ども部屋。それを自分が手に入れることへの喜びが、体中から伝わってくる。そして、その姿を見ていると、「自分は良い仕事をしているな」と心から思える。

だからこそ、自分もいつか、自分の子どもをそんな風に喜ばせたいと思っていた。それは美咲との子どもになるはずだった。なのに、もしかして……。

とにかく、「今日うちに来れない？」とメールを打ってきた美咲に会いに行こう。そして、事実を確かめよう。

「仕事終わったらすぐ行く」

そう返事をして、孝太郎は急いで業務に取り掛かった。

自宅に帰った美咲は、孝太郎にメールしたことを後悔していた。

今この何も考えられない状況で、孝太郎にきちんと話せるだろうか。自分の子どもを持つことを孝太郎がとても強く望んでいることは知っている。そして、美咲自身も二人の子どもたちに囲まれて過ごす夢を持っている。そんなお互いの希望を打ち砕くような告白を、この状態で果たしてできるのか。

夕方とはいえ、日が延びた分、明るさを失わない自室で、電気もつけずに体育座りをしていると、エントランスのインターホンが鳴った。

孝太郎には合鍵を渡してある。でも、最近はいきなり鍵をあけることはしない。彼なりの気遣いなのかもしれない、と美咲はぼんやりと思う。

重い腰をあげ、ロックを解除した。そして、2分後、もう一度インターホンが鳴った。ドアの鍵をあげると、手に白い小さな箱を手にした孝太郎が立っていた。

「これ、駅前のケーキ屋さんで買ってきたから」

「有り難う。入って」

「美咲、電気もつけずに大丈夫か」

「あっ、そうだね。もう夜だね。つけようか」

さして困った素振りも見せず、美咲は電気のスイッチを押した。

部屋がパツと明るくなり、周囲を見回すと、美咲の部屋とは思えないほど、乱雑に物が散らかっていた。脱ぎ捨てられたパジャマ、食べたままのお菓子のゴミ、途中まで読まれていたであろう雑誌。

孝太郎は、美咲の精神状態を案じた。無理もない。乳がん宣告以来、日常当たり前にあったさまざまなものを失ってきたのだ。そして、今回、もしかしたら俺との結婚という大きなイベントも……。だとしたら、せめて俺はなんとか美咲を支えなければならない。頭ではそう理解している。でも、もしあの話が出てきたら……。

「ケーキ、あとでもいい？」

「もちろん。その前に夕飯の時間だけだね」

「あっ、そうか。病院に行っていて、昼ごはん遅かったから、まだお腹空いてないや。孝太郎くんは？」

「俺も大丈夫。それより、美咲、本当に大丈夫？ 来週からの治療のことで、何か病院で言われた？」

孝太郎は、つとめて自然に、話をふった。

「うん、そうだね。言われたといえれば言われたかな」

「そうなんだ、何か俺にできることある？」

「大丈夫。でも、話はしといたほうがいいよね。まあ、それでわざわざ来てもらったわけだから……」

美咲は目を閉じて、深呼吸を3回した。孝太郎はその間、ひと言も発することなく、美咲の次の言葉を待った。

「……私ね、子ども産めなくなるかもしれないんだって。でも、早く治療を始めないといけないみたいで。妊娠の可能性を残す方法を取るにはもう時間がないんだって。それをやっているって、今度は自分の体が危なくなるかもしれないんだって」

美咲は、孝太郎が言葉を挟む隙を一切与えず、一気に続けた。

やっばりそうだったか。孝太郎は自分の推測が間違いなかったことを悟った。しかし、だからといって、どう言葉を返すかというところについては答えを持っていなかった。孝太郎が下を向いて押し黙っていると、美咲がさらに続けた。

「孝太郎くんはどう思う？ 治療を遅らせてお金を払えば、妊よう性温存という方法も取れるかもしれないんだ。それなら、治療前に卵子を凍結したり、受精卵を凍結したりして、治療後に出産できる可能性も高められるみたい」

「でも、それをやったら、治療が遅れるんだろう。まずは美咲の体が一番じゃないのか。抗がん剤治療をした後だって絶対に出産ができないというわけじゃないんだし……」

「絶対じゃないけど、かなりダメージを受けるんだって。生理が止まってそのままずっと元に戻らない人もいるみたい」

「でも、戻る可能性だってあるわけだよ」

「そんなの分からないよ。分からないし、孝太郎くん、いつになるか分からない状態ですと待ってられるの？ 子ども、好きなんですよ」

美咲の言葉に棘が混じり始めた。孝太郎は感情的になろうとする自分をなんとか制御する。

「美咲の辛い気持ちは痛いほど分かる。でも、今は、まだ見ぬ子どものことよりも、まずは目の前の美咲のことが一番心配だ。だから、先のことは考えず、治療に向かおうよ。俺もサポートするし。先のことはまたそのときに一緒に考えよう」

嬉しさの反面、「子どもはいなくてもいいから」とは言ってくれない孝太郎に、一抹の不安を感じた。

やっぱり、子ども、欲しいんだな。美咲は孝太郎の気持ちはその瞬間、はっきりと分かった。

「……うん、そうだね。まずは自分の体だよ。来週から抗がん剤治療受けるよ。子どもことは、また自分が元気になってから、そのときに考える」

「美咲、有り難う。まだ長いけど頑張っていこうな。俺も美咲が困ったらいつでも駆けつけるから」

これでいいんだ、これで。孝太郎は悪くない。でも、私だって悪くない、私だって本当は……。抑えていた涙がこみ上げてきた。そんな美咲を孝太郎は抱きしめた。でも、その感触がいつもと違うことを美咲は感じ取った。孝太郎の中から愛情が消えていく前触れのように感じられた。

「それでは、これから抗がん剤を順番に入れていきますね。何かありましたら、手元のボタンを押して看護師を呼んでください」

「分かりました」

「途中でちよっと眠たくなるかもしれませんが。ご主人、ちよっと長いですけど、付き添い願いますね」

「はい。有り難うございます」

ご主人と言われたからか、孝太郎は苦笑いをしながら答えた。

抗がん剤の通院治療の初日、孝太郎は会社を休んで付き添うと言い出した。これまでは美咲が「一人で大丈夫」と言う、引き下がっていたが、今回は「いや、でもやっぱり行くよ」と引き下がらなかった。

美咲への愛情が減ってきていることを悟られまいとしているのかもしれない。あの日から、孝太郎は結婚式や将来のことを言わなくなった。それまでは、「結婚式に向けて頑張っって病気治そうな」と声を掛けてくれていたが、今はただ、「早く治そうな」というだけ

だ。そんな風に思わせているのもなんだか申し訳ない。美咲は抗がん剤治療に向かうまでの数日間、これからの孝太郎とのことを必死に考えた。これまでは一緒にいることを前提に考えていたが、今はちょっと違う。治療が終わったら、別々の道を歩こうと考えている。もし万一生理が来るのなら、孝太郎と一緒にされるかもしれないが、そんなわずかな可能性に何年も付き合わせるわけにはいかない。この人にはこの人の子どもと一緒にの人生がきつとある。それを私のエゴで邪魔しちゃいけない。本当は今すぐに孝太郎の前から消えてしまいたいが、責任感の強い孝太郎は、それを許してはくれないだろう。ならばせめて、あと半年だけ、孝太郎に甘えさせてもらおう。それが愛情であろうとなかろうと……。美咲を徐々に眠気が襲ってきた。意識が遠のくことで、美咲は現実から切り離される。

キンモクセイの香りが、秋の到来を孝太郎に伝えてくる。

「秋か……」

本当ならこの時期あたりに美咲と結婚式を迎えるはずだったんだよな。そして新婚旅行に行き、子どもを授かり、新居を構える。慎ましくもささやかな夢。

それが今は、抗がん剤治療の副作用に苦しむ美咲と、なんとか一日一日を凌ぐ日々だ。三週間に一度の通院治療。響きとしては楽そうだが、翌日からの吐き気や倦怠感に苦しむ美咲。髪の毛は抜け、バンドナを巻いてそれを隠す美咲。爪や皮膚は荒れ、外出を拒むようになった美咲。「私もあまりこういう状態見せたくないから、そんなに来られなくても気にしないで。何かあったらすぐ呼ぶから」

そう言ってくれる美咲に素直に甘える。

こういうときこそ、男がしっかりしなければという正義感が、孝太郎をさらに苦しめる。

もし治療が終わって体が良くなったとしても、美咲の妊よう性が戻ってこなかった場合、自分はどうすべきなのだろうか。

正直、子どものことは諦められない。一番は美咲との子どもがほしい。でも、それが難しかったとしたら、俺はどちらを選ぶのだろうか。子どもがいなくても美咲といることを選ぶのか。それとも子どもをつくるために別の誰かと一緒になるほうがいいのか。自問自答しながらも、答えが出つつあることは自分でも薄々気づいている。ただ、その行動を取ることが、これまでの自分の生き方に反するようで、苦しい。

そして、一人になった美咲はどうなるのか。そう思うと、簡単に決断は下せない。

孝太郎は、今日もまた、コンビニで缶ビールを半ダース買い込み、家路へと向かった。

美咲は病院にいるときよりも、家にいるときのほうが辛かった。病院で治療を受けているときは、どこか前に進んでいる気がしていた。でも、家に帰ると、ほとんど毎日、副作用と戦うこととなった。加えて、自分の弱気の虫と嫌でも対峙せざるを得なかった。

失った左胸。

戻ることがないかもしれない妊よう性。

恋人との結婚や幸せな家庭を築くという夢。

大幅に遅れをとったキャリア。

26歳という今しかない時間。

こうした多くの喪失感に日々悩まされている。がん罹患によるこうした喪失のことを「キャンサーロスト」と呼ぶらしいが、今の自分は、まさにロストだらけだ。

これまでは、病気をした人のことを、何か罪深いことをしたからそうなったのだ、と思っていた。そうなった原因は本人にもあるのだと。しかし、自分になってみて、改めて感じる。私が何か悪いことしたのか。なぜ私ばかり、たくさんのものを失わなければならぬの。

大学時代の同期である絵理奈は、すでに結婚して子宝にも恵まれているし、瞳はCAとして世界中を飛び回っている。それに引き換え私は、バンダナ姿で、ほぼ一日中バジャマで家を徘徊するだけの毎日だ。だるいし、気持ち悪いし、顔も吹き出物だらけ。治療が無事に終わったとしても、失ったものは恐らく取り戻せない……。

いっそあのまま死んでしまったほうが良かったのではないか。こんな自分に生きている意味があるのか。

孝太郎くん、教えて。私は生きている意味があるの？

12月。街がクリスマススムードで色づき始める季節に、美咲の抗がん剤治療は終わりを迎えた。約半年間、定期的に通院し、抗がん剤治療を続けた。その甲斐あり、今後は定期的な経過観察をしていけば良いということになった。再発の可能性もゼロではないが、少なくともCT画像上、がん細胞は完全に消え去っていた。

そのことを電話で孝太郎に伝えると、孝太郎は「美咲、頑張ったな、有り難う、有り難う」と泣きじゃくった。

そして、その涙声につられて、美咲も涙ぐんだ。

でも、美咲にとっては、これは嬉しい涙ではない。むしろ、孝太郎との別れが近づいていることの悲しさだった。

この後、生理はちゃんと来るのだろうか。乳房の再建だって全然考えられていない。仕事もどうなるのだろうか。

大海原に放り出されるような、そんな感覚に襲われる。

美咲の電話を受けた孝太郎も、嬉しさを感じながらも、自分の中でどこかでケジメをつけないければならないと感じていた。美咲の治療が終わるまではしっかり支えると決めている。

た。でも、その先はやはり美咲と一緒にいることに自信が持てなかった。何よりも、子どもが授けられないとなったら、自分に嘘をつきながら生きていかなければならなくなる。

この半年間、美咲を陰で支えながら、孝太郎は、すでに20代で所帯を持っている何人かの友人の家に遊びに行った。名目は「新居祝い」や「引越し祝い」だったが、実際には、子どもがいる家庭の空気に触れることが目的だった。

そして、幼な子を抱きながら、慌ただしくも充実した笑顔を見せる彼らを見るにつけ、やはり自分もこうした環境を手に入れたいと強く願うようになっていった。

赤ちゃんを抱かせてもらったときなどは、このまま連れ去ってしまいたい衝動に駆られるほどだった。自分はやっぱり子どもが好きなんだ。そう思うに十分な経験だった。

年が明け、美咲は27歳になった。会社には抗がん剤治療が終わったこと、また後遺症の影響などで体に不安があることを伝えた。人事課の村山からは、「治療が無事終わって良かったですね。まだあと半年近くは休職できますので、くれぐれも無理しないでください。とりあえずあと3ヶ月間、療養という形でお休みしてはいかがでしょうか。4月から新年度ですから、そこを目処に準備するということでどうでしょう」と言われた。

「できれば早めに戻りたいと思っていましたが、ご迷惑をおかけすることになるかもしれないので、ご配慮ありがとうございます」と電話越しに話しながら、内心はホッとしていた。まだ髪の毛が少ししか生え揃っていなかったからだ。

ウィッグを付けて出社できないこともないが、あまり人に気づかれたくはなかったし、そういう目で見られるのも悔しい。恐らく社内では、さまざま憶測が飛び交っているだろう。課長と合わなくて、メンタルをやられたという噂があるとも聞いていた。あの課長のことだ、もしかしたら美咲の病気のこととも言いふらしているかもしれない。本来そういう情報は機微情報として、他人に伝えてはいけないことになっているが、あの課長ではアテにならない。

とにかく、あと3ヶ月間。何も考えずに休もう。美咲は、また布団に潜り込んだ。

孝太郎は、白い息を吐きながら、夜の公園でブランコを漕いでいた。頭では、もう待ちきれない思いが渦巻いている。美咲の生理はどうなっているのか。聞きたいが、それを聞いた瞬間、何かを決断しなければならぬことにまだ戸惑いを抱いていた。

乳房切除をしてからというもの、美咲とは関係を持ってなくなっていた。

何か自分の中で、関わりを持つことが怖くなっていた。美咲からは何度かそのことを聞かれたし、抗がん剤治療中であっても、できないわけではないと先生から言われたと伝えられていたが、やはり無理だった。

美咲も次第に諦めたのか、そのことに触れなくなった。

そういった関係を持たなくなったのに、生理が来たかどうかを確認するというのは、明らかに美咲の妊よう性を確かめるだけの行為になってしまう。

満身創痍の美咲をこれ以上傷つけることはできない。でも、自分ももう30代間近だ。人生の決断をしなければならぬ日は近づいている。

家族にも、美咲のことは聞かれていた。その都度、治療が終わったら話し合うから、と返していた。孝太郎は、一人っ子だ。両親の孫の誕生に対する期待は、孝太郎が一身に背負っていた。

そんなプレッシャーに、今の美咲ではきつと耐えられないだろう。

美咲の生活が元に戻るまではこのままでしょう。美咲が仕事に戻れたら、すべてをハッキリさせよう。孝太郎は、ブランコをゆっくりと降り、帰路に向かった。

4月が来て、美咲は職場復帰を果たすことができた。村山らの計らいにより、総務部に異動することで、引き続き会社に籍を置いておけるようになった。せっかく営業が面白くなってきたところなので、現場を離れるのは少し残念な気もしたが、いつどんな後遺症が襲ってくるかも、再発・転移がやってくるかも分からない中、責任の大きい仕事はやはり難しかった。

しかし、職場復帰早々、美咲は愕然とした。自分にはほとんど仕事が割り当てられていなかったのだ。

オフィスの電球が切れたり、何か社員から相談が入ってこない限り、美咲の出番はやってこない。

席も窓際で、一番近い社員の席から2つも離れている。

「何か私にできることはありませんか？」

「いやいや、今は大丈夫ですよ。神野さんは体のこともあるので、くれぐれも無理はしないでくださいね」

総務課長の清水は、そう言ってくれるが、明らかに気持ちは入っていないのが分かる。

もちろん、周囲は何かあっては困るから、こうした対応になるのも分からなくはない。

でも、職場でやることがないのは逆に辛い。1時間がこんなに長いなんて。

一週間もすると手持ち無沙汰であることに早くも耐えられなくなってきた。

周囲からも、「やることのないのに、会社にしがみついている」「営業部の仕事が嫌で、体調不良を装って総務部に逃げた」などと変な噂も入ってきた。

中には、あからさまに美咲のことをちらっと見やって、「あー、私も一日中日向ぼっこしてたいなー」と大声を出したり、「神野さん、心配していましたが、ホント元気そうで何よりです」と嫌味を言ってきたりする者も現れた。

このまな板のような左胸を見せてやりたい衝動に駆られつつ、美咲は感情を抑えるのに必死だった。

確かに体力的にはまだ本調子とはいかないため、今はこの状況に耐えるしかない。美咲は、復帰早々に、「治療中の辛さのほうはまだマシだった」と思うようになっていた。

美咲の職場復帰を知り、孝太郎は、ようやく長いトンネルを抜けたような気持ちになっていた。抗がん剤治療の期間と合わせて、約9ヶ月。孝太郎は、胸に秘めた思いをずっと抱えて生きてきた。でも、もうその思いはパンパンに膨らみ、今にも弾けそうだった。

これまでの自分を保つのは、もう限界だった。次に会ったとき、美咲には体調のことや生理のことをきちんと確認しよう。それでも治療前の状態に戻っていなかったら、美咲には申し訳ないが、別れを切り出そう。

酷かもしれないが、このままズルズル付き合っても、それは逆に美咲のためにもならない。

メールで「職場復帰してから体調どう？」と送ると、「なんとかやってる。そろそろ一度会おうか」と返ってきた。

今週の土曜日、孝太郎は美咲の家に行くことになった。

合鍵とこれまで美咲に借りていたCDや書籍をバッグに詰め込み、孝太郎は家を出た。

もしかしたら今日で美咲と会うのは最後になるかもしれない。そう思うと、感傷的になる自分がいるが、その気持ちに引きずられないよう、自分に強く言い聞かせる。「お前は子どもを持ち、幸せな家庭を築きたいはずだ。美咲とそれを叶えられればベストだったが、それがダメなら、別の女性とそうなるべきだ。ここで美咲と一緒になくても、美咲を恨み続ける人生になってしまう……」

電車を乗り継ぎ、美咲の住むマンションの最寄り駅に降り立った孝太郎は、まだ葛藤を繰り返していた。徒歩5分ほどのマンションに着くまでにも、なかなか気持ちはまとまらなかった。これまでの美咲との数々の思い出が蘇ってくる。

サークルの飲み会を抜け出し、二人でカラオケに行った日のこと。

付き合い始めて初めて行ったデート。

婚約指輪を渡した日に喜んでくれた美咲。

恥ずかしがりながらも結婚式場選びを楽しんでくれていた美咲。

何度も踏ん切りをつけようとしてきたのに、いざとなると、それを拒もうとする自分がいることに気がついた。

でも、行かなきゃ。今日こそ言わなきゃ。

孝太郎は、マンションのエントランスで、いつものようにインターホンを押した。

「待ってね」

という美咲の声とともに、入り口の扉が開いた。

エレベーターで5階に行き、美咲の部屋の前まで来た。最初から焦りを悟られないよう、2度ほど深呼吸をして、孝太郎は部屋のインターホンを押す。

「はい」

美咲の声が部屋の中から聞こえてきた。いつもの聞き慣れた声。今日で最後かもしれない声。

「早かったね」

「よお、久しぶり」

美咲の部屋は、随分と整理されていた。不要になったものを捨てたのかもしれない。

「適当に座ってて。コーヒー入れるから」

「うん」

孝太郎は返事をして、リビングに2つある椅子の一つに腰を掛けた。

「体調どう？」

「うん、だいぶ良くなった。髪の毛もだいぶ生えてきたでしょ」

そう言っ頭を撫でる美咲の髪型は、ボーイッシュなショートカットだった。

以前のロングに戻るには、まだ時間が掛かりそうだが、バンドナを巻いたり、ウィッグを付けたりといった手間を必要としなくなったことは、美咲を幾分開放的にしているように感じる。

「そうだね。ショート似合うよ」

「有り難う。私も結構気に入ってるんだ」

自然と会話が弾む。それを自分の手で壊すことに、孝太郎は心苦しさを感じる。

コーヒーを2つ手にして、美咲がもう一つの椅子に腰を下ろした。

「はい、ミルク2つ」

「おー、有り難う。やっぱり美咲だな」

コーヒーに、ミルクを2つ入れるのは、孝太郎の一番好きな飲み方だった。ただ、そんな配分を会ってすぐの人が分かるはずがない。だいたいはブラックか、砂糖とミルク一つずつだ。

砂糖はいらないのでミルクをもう一つください、とは周囲への気遣いを欠かさない孝太郎には、とても言えない。

だからこそ、美咲のように言わなくても分かってくれるパートナーがいてくれて、どんなに気持ち的に救われていたことか。

今ならまだ引き返せる。美咲と一緒にいられる。

コーヒーを飲みながら、美咲の仕事の様子を聞いていた。職場の同僚とうまくやっっているらしい。「仕事、衝動的にやめなくて本当に良かった。孝太郎くんのおかげ」と言われたときには、心に引っかかっていたものが取れた気がした。

仕事にも戻れたなら、美咲はもう大丈夫だ。

「体調はどう？」

孝太郎は、生理の話に持っていきこうと、話をふった。治療後わずか3ヶ月程度で戻っているとは思えなかったが、いつまで待てばいいのかという目処が立つものでもない。

「まあまあかな。仕事に行く分には問題ないよ。ちょっと体力的にはしんどいときもあるし、今後はリンパ浮腫なんか心配ではあるけど」

「そっか。確かに、今後のことは心配だよな。他に困ったことはない？」

「そうだなー。体調とは違うんだけど、やっぱり今後、乳房を再建するかどうかというのは考えちゃうよね。孝太郎くんはこのままでもいいって言うてくれたけど、やっぱり片方ぺちゃんこでずっとというのめね……」

「そうだよな。それも考えちゃうよな」

なかなか核心に触れない苛立ちを抱えながら、孝太郎は美咲の言葉を待った。

「……あとね。生理のことなんだけど、やっぱり今のところ戻ってこないんだ。先生にも聞いてみたんだけど、抗がん剤の影響は人それぞれだから、いつどうなるかは分からないんだって」

「そうなんだ……」

孝太郎は、言葉に詰まった。いざその話を振られて、「俺はやっぱり子どもが欲しいから別れよう」とストレートに言えるほどのドライさはない。

そんなときだった。美咲から耳を疑う言葉が発せられた。

「……だからね。私、別れようと思うんだ。孝太郎くん、子どもが好きなの知ってるし、この先、どうなるか分からない私と一緒にいるより、赤ちゃんしっかり産める子と結婚したほうが幸せになれるだろうから」

「えっ、美咲、何言ってるんだよ。俺はそんなこと一度も……」

「ううん、私分かるんだ。孝太郎くんは優しいから、私が元気になるまでは気持ちを抑えて支えてくれていたんだよね。有り難うね。でも、もう大丈夫。仕事にも戻れたし、新しい人生やっていこうと思ってるから。子どものことも、もしかしたらいつか産めるようになるかもしれないしね。そのときは、子ども同士、遊ばせようよ」

「そんな……」

「ね、そうしよう。これまで本当に有り難う。これからはサークルの先輩と後輩ということで、引き続きよろしくね」

「いや、でも……」

「もう私、決めたから」

孝太郎の目に、美咲の凛とした表情が映った。

「……美咲の気持ち、そこまで固まっているなら分かった。こちらこそこれまで本当に有り難う。7年間、本当に楽しかった。あと、合鍵とかCDとか借りていたもの持ってきたから……」

「有り難う。私も借りてたやつあるから、ちょっと待っててね」

まさか美咲の方から話を持ちかけてくるとは思わず、孝太郎は意外に思ったが、気が変わってしまったわないうちにと、あくせくとバッグから返却物を取り出し、それらをリビングの机に並べていった。

程なくして、美咲からも孝太郎への返却物が手渡された。その中には、ちょうど一年前に贈られた婚約指輪も入っていた。

「これで全部かな……」

「多分大丈夫だと思う。何かまた出てきたら、処分しちゃっていいよ」

「そんな、もうずっと会わないみたいな言い方しないでよ。渡しに行くからそのときは近況報告しようよ」

「そうだな。分かった。でも、本当に、美咲を幸せにできなくてゴメン……」

孝太郎は、頭を下げた。その姿を目の前にした美咲は、必死に涙を堪えた。こうして美咲と孝太郎は、婚約を解消し、7年間の交際の末、破局を迎えた。

4

本当にこれで良かったんだろうか……。

孝太郎が後にした自室で、美咲は自問自答を繰り返していた。

今の自分は、職場でもうまくいっていないし、体だってがんこそ消滅したが副作用や後遺症でボロボロだ。生理も当然まだ戻ってこない。

加えて最近是不眠にも悩まされており、不安ばかりが襲ってくる。

でも、そんな告白をしてしまえば、孝太郎のことだ。別れを切りだそうにも躊躇してしまっただろう。

美咲には孝太郎の本心が痛いほど分かっていた。彼はどうしても子どもが欲しかった。だから、その可能性が極めて低くなってしまった美咲と結婚するわけにはいかなかった。でも、責任感の強さから、それを言えずにここまでズルズル来てしまった。

それが分かりすぎていたからこそ、美咲にはもう耐えられなかった。

自分から楽になろうと思った。孝太郎という柱を失うことは辛かったが、いつか来る別れを相手から切り出されるのはそれ以上に怖かった。

でも、この先、どうやって生きていけばいいのだろう。

孝太郎以外に、美咲が心から頼れる人はいなかった。絵里奈や瞳といった学生時代の友人たちとはがん宣告以来疎遠になっていたし、勤務先の同僚たちには、そもそも本当のことすら言っていない。改めて自分には孝太郎しか頼れる人間がいなかったということに気づかされる。

最愛の人を失った上に、今後あとどれだけのものを失えばいいのだろう……。

ここ一週間、ほとんど家に引きこもっている。会社にも毎日のように体調不良の連絡を入れている。

自分にしかできない仕事があれば、もしかしたら出勤する意欲もいくらか出ていたかもしれないが、今の美咲の仕事は、誰だって代わりができる雑用だ。しかも、日に数回しか出番はやってこない。そんな環境では、誰だって頭がおかしくなってしまう。

次第に美咲は、連絡すらしなくなっていた。どうせ会社でも必要とされていないし、がん罹患経験者には結局職場復帰なんて夢のまた夢なんだ。

そうやって自分を正当化しながら無断欠勤を繰り返す美咲に、人事課の村山から連絡が入った。

「神野さん、ご無沙汰しています」

「こちらこそ、その節はお世話になりました」

「いえいえ。ところで最近欠勤が続いているようですが、体調のほういかがでしょうか。もしまだ体調不良が続くようなら、休職などの調整も考えますが……」

「わざわざ私のことで有り難うございます。ただ、ちょっとこれ以上、そちらにご迷惑をおかけするわけにはいかないので、退職をさせていただこうと考えています。村山さんにはいろいろお世話になりました」

「……そうですか。それでは仕方ないですね。では、退職関連の書類をこちらからお送りさせていただきますね。私物などはいかがいたしましたでしょうか。こちらに一度取りにいらっしやいますか？」

「いえ、もう結構ですので、そちらで処分していただけますか」

「分かりました。では、処分させていただきますね。結局あまりお力になれなかったようで申し訳ありませんでした」

「いえ、私のほうが悪いんです。せっかく配置転換までしてもらったのに……。では、書類の方届いたらまた返送しますね。失礼します」

電話を切り、美咲は、ベッドに潜り込んだ。無断欠勤が続いていたとはいえ、ひと言の引き留めもないとは、自分はどれほど無用な人材だったのか……。この5年間は何だったのか……。でももういい。これですべてを失ってしまった。

婚約者も、出産の夢も、片胸も、そして仕事までも……。

美咲は、完全に希望を失っていた。それはさながら、出口の見えない真っ暗なトンネルの中を彷徨っているようだった。

何もかも失った美咲は、結婚資金として蓄えていたわずかな貯金を切り崩しながら日々を生きながらえていた。

外に出るのは億劫なので、カーテンを閉め切った部屋で週のほとんどを過ごし、一週間に一度だけスーパーで食材を買い込むような生活を繰り返していた。

テレビやインターネットを見ると、楽しそうにデートをしているカップルや、子育てで満喫している家族がふいに出てきては、今の美咲の生活を見下してくるような気がして、できるだけ距離を置くようにしていた。

美咲の状況を知らない友人たちから、たまに近況報告などのメールが来るが、返事をするの面倒だった。

こんななんだったら生きていても意味ないんじゃないか。美咲は、自暴自棄になっていた。

実際に、インターネットで、「自殺 方法」と調べたこともある。でも、そこまでの勇気は出なかった。

そして、そうこうしているうちに貯金が底をついた。

もう実家に帰ろう。東京は疲れた。

実家の両親は、がん告知以来、しきりに美咲を心配してくれていたが、二人とも持病持ちであることから、できるだけ心配をかけないように、小さな嘘を繰り返していた。

ステージ0で、乳房も温存できたという嘘。

だから出産の可能性は十分残っているという嘘。

孝太郎との結婚は、一年延期されたが、実際は順調に進んでいるという嘘。

もちろん、仕事も営業として復帰し、バリバリやっていることになっている。

そのはずの美咲が、もしこんな姿に戻ってきたら、どう思うだろうか。両親の持病がさらに悪化してしまうかもしれない。美咲自身も、北海道で子宝に恵まれている妹と比較されたら、うまくやっていけるか自信がない。

それでも、ここにはもういられない。

美咲は重い頭でそう決心し、久しぶりに慣れたダイヤルをプッシュし始めた。

5

美咲は、東京から実家のある北海道に戻ってきた。

春とはいえ、まだ少し涼しさも残る中、両親と久々の再会を果たした。両親は温かくも、心配そうに出迎えてくれた。

そして、美咲は、昔4人で団らんしていたリビングで、積み重ねていた嘘を一つひとつ、真実に塗り替えていった。

眞知子は途中から泣き出した。健一は、乳房を切除した話のあたりで席を立ってしまった。二人とも、乳がんの手術をしたということ以外、ほとんどすべてが嘘だったということとを初めて知ったが、娘の数々の喪失を簡単には受け入れられなかった。

それでも、そんな娘を守るのには自分たちしかいないとばかりに、その後両親は、学生時代にタイムスリップしたかのように美咲の世話を甲斐甲斐しくやってくれた。

美咲は、申し訳ないと思いつつも、他に手段もなく、この両親の好意に全面的に甘えた。

外で働くでもなく、趣味を楽しむでもなく、自室にじっと閉じこもる毎日。

1年が過ぎ、2年が過ぎた。

今頃、友だちたちは、幸せな家庭を築いているだろうか。職場の人たちは、今もバリバリと働いているだろうか。

そして、孝太郎は、新しい恋人を見つけて子どもを産んで楽しくやっているだろうか。すべては想像に過ぎないが、みんなが幸せそうに感じられた。

それに比べて、一人都会を離れ、両親と一緒にひっそりと暮らす自分。まだ20代というのに、気持ちはめっきりと老け込んでしまった。

こうして閉じこもっている以上、希望の光が差し込んでくることはないということはおかっていた。しかし、このときの美咲はまだ、深くえぐられた傷を人前に晒すだけの勇氣は持てなかった。

美咲が実家に戻り3年が経った頃、市民公開講座のチラシを持って、眞知子が部屋に入ってきた。

「新聞に挟まっていたから、一応渡しとくね」

見ると、タイトルには「がん罹患後の人生を考える」とあった。そして、何人かの医師や医療従事者に加え、若いときに子宮頸がんを患い、出産の夢を失いながら、今はそのときの経験を次世代に伝える活動をしている30代の女性がゲストに来るという。

医師や医療従事者の話は正直どうでも良かったが、このゲストの方の話が聞けるということには心惹かれた。

思えば、美咲は、がん罹患後、同じような境遇の人とほとんど接することがなかった。病院には、がん患者団体などのチラシが置いてあったし、看護師の方にも「そういう会に出てみてもいいかもしれませんね」と勧められてはいたのだが、なんとなく傷の舐め合いになるような気がして、足が向かなかった。

でも、確かに、自分と同じような喪失経験をした方が、その後、何か生きがいを持てるようになっていくのであれば、それは自分にとっても役に立つ話ではないかと思いはじめた。

そんなタイミングで届いた一枚のチラシ。美咲は、早速、眞知子の分とあわせてインターネットで申し込みをした。数日後、当選メールが届き、眞知子に同席を頼んだ。眞知子は、泣きながら快諾してくれた。

「もちろん一緒に行くわよ。二人で外出なんて久しぶりね。終わったなら、外で夕ご飯でも食べて帰る？」

眞知子は、美咲の帰省後、初めてというくらい嬉しそうな笑顔を見せた。美咲も久々に、心が前向きになった。

当日のそのゲストの方の話は、美咲にとって共感できるものばかりだった。

20代前半で子宮頸がんになり、子宮を摘出せざるを得なくなり、子どもを産む夢が完全に失われたこと。

その後、職場を追われ、求職活動を始めるが、がん罹患経験者ということで、なかなか正社員としては採用をもらえなかったこと。

結婚もしたかったので、婚活パーティーのようなところに行ってみたが、やはり周りに引け目を感じてうまくいかなかったこと。

でも、そんな自分の辛い体験をいろいろな人に話すうちに、応援してくれる人が出てきて、今の会社に勤務が決まったこと。そして、その会社の後押しもあり、このような社外活動を認めてもらっていること。今では、パートナーにまで恵まれているということ。

最後に、自分と同じような経験をする人が一人でも減るように、がん検診を若いときから受けてほしい、とその女性は力強く訴えた。

その講演に、美咲は大いに勇気づけられた。

自分と似たような境遇を抱えながらも、こんなに強く、前向きに生きている人がいる。たった一人でもそういう人がいるという事実だけで美咲には十分だった。

その後、眞知子と入った中華料理屋で、美咲は眞知子にお礼を言い、これから仕事を探してみる、と今の決意を伝えた。眞知子はまた泣いていた。

その後、美咲は、少しずつではあるが行動を始めた。

講演で話してくれた女性は、求職活動に苦労したと言っていた。美咲自身も、以前の職場では、営業部から総務部に異動させられ、閑職に追いやられた経験を持つ。

こうした苦労を経験しやすいがん罹患経験者が、新しい仕事を見つけるお手伝いができないかと考えた。

インターネットでいろいろと検索すると、「キャリアアカウンセラー」という資格があるらしく、数ヶ月の講座と試験で資格が手に入るという。

美咲は直感的に、「これだ!」と思った。3年間蓄えていたエネルギーが開放されたように、美咲は、締切が直前に迫っていたその講座に申し込み、電車で1時間かけて、毎週のように講座に通った。

最初は他の受講者にあえてがん罹患者であることは伝えなかったが、気が知れた仲間になってくるうち、ポツポツとその事実を話せるようになっていた。みんな、一様に驚いていたが、だからといって態度が変わるといふことはなかった。むしろ、自分たちのキャリアアカウンセリングに役立てたいと、美咲の経験に関心を寄せた。まさか、自分の経験がこうして人の役に立つなんて……。

美咲は、充実した3ヶ月を過ごし、そして、試験にも無事合格し、キャリアアカウンセラーの資格を手に入れた。

嬉しさの反面、一度行動を始めた美咲にとって、資格取得だけでは満足感を得ることはできなかった。

「仕事がしたい」そう思っていた美咲は、講座の事務局の担当者にも、「キャリアアカウンセラーの資格を使って仕事をしたいんです。どこか紹介してもらえませんか？」と相談した。

しかし、その担当者の返事は、「今のところ紹介できるのはボランティアくらいしかないですよ」といったものだった。

ボランティアも悪くはないが、少しでもいいから対価を得て、両親に恩返しをたいと考えていた美咲は、インターネットで検索し、札幌市に支店を持つ転職エージェント会社に連絡を取り、面談の予約を入れた。

当日、駅前の雑居ビルの4階にあるその転職エージェント会社に入ると、数名の中高年男性がロビーのソファに腰を掛けていた。

受付の女性に、予約していることを伝えると、ソファで待っているよう促された。

「この歳で仕事がなかったり、うまくいってなかったりするのは大変そうだな」

と40〜50代前後と思われる中高年男性たちを横目で見やる。

順番を待ち、自分の番になり、個室に促される。

目の前の若い男性アドバイザーに、履歴書を見せ、事情を伝えた。

「キャリアアカウンセラーの資格を使って、何かお仕事をしたいということですね」

「はい、そうなんです。仕事は4年くらいブランクがあるので、あまり贅沢言えないのは分かっているんですが、できれば資格を活かしたいなと……」

「なるほど。4年のブランクはどのような背景からなのですか。よろしければ参考までに聞かせていただきたいのですが……」

「はい。実は、実家の母ががんを罹患してしまい、父も体が弱いもので、その看病のため、4年前に東京からこちらに戻ってきたんです。去年ようやく病状も一段落したので、資格をとって働けないかと思いついて……」

嘘をついた。本当のことを言ったら絶対にうまくいかないと思ったからだ。突発的についた嘘だが、我ながらなかなかうまく話をつなげられたと美咲は思った。

「そうでしたか。それは大変でしたね。ちなみに、ブランクがある方は最初はハローワークなどに行かれるケースがありますが、ハローワークには行かれましたか？」

「いえ、全然考えていませんでした。確かにそうですね。私の場合、転職って感じではないですものね」

「いえいえ、いいんです。分かりました。ちょっとお待ちいただけますか」

そう言うのと、その男性は席を立って、扉の外に出た。

どうしたんだろう。やっぱり親の介護っていうのが怪しかったのかな。美咲は、少し不安になってきた。

時計の針が5分ほど進んだ頃、男性は戻ってきた。

「お待ちせしました。ちょっとうちの者に確認してきましたんですけど、今、ちょうど事務の枠に空きが出そうなんですよ。とはいえ、最初は正社員ではなく、またアドバイザー枠でもなく、3ヶ月間の契約社員からということになります。良かったら応募だけでもしてみますか？ 正直うち、給料は大したことないんで、そっち方面の期待はできませんけど……」

最後の方は、小さな声で美咲にだけ聴こえるようにささやくアドバイザーを見やると、どうやらこの話は本当らしい。

これからゆっくりと仕事を探していこうと思っていたので驚いたが、「枠に空きが出そう」という話だったので、あまりモタモタしていると、誰かに先に入られてしまうかもしれない。

契約社員だとしても、今はどうせ無職なのだから、まずはブランクを埋めるのが先ではないか。

そう自分に言い聞かせ、美咲は、若いアドバイザーにこう告げた。

「この業界は未経験ですが、それでも応募してよろしいのでしょうか？」

「その点も考慮して面接しますので問題ありませんよ。いざれキャリアアカウンセラーとしての道を考えておられるなら、まずはこの環境に慣れておくのも大事だと思いますし。何より、資格のない私でもできているんですから」

優しい笑顔だった。名札を見ると、「富樫雄太」とあった。それが雄太との出会いだった。美咲は、そのとき31歳になっていた。

キャリアアカウンセラー資格を持つ事務員として、美咲はその後、この雑居ビルの4階で、一心不乱に仕事をした。約4年間のブランクを埋めるかのように、そして自分の体のハンデを気づかれないように、とにかく朝から晩まで、仕事にのめり込んだ。

最初は事務処理からはじめ、少しずつ担当アドバイザーのサポートなどにも入れるようになってきた。

病気のことは最初は社内に伝えていなかったのだが、2年が経ち、正社員に登用されるタイミングで、意を決して上司に伝えた。上司は、嫌な顔をするどころか、「ぜひその経験をこれからも相談に活かしてほしい」と後押ししてくれた。

治療からすでに6年以上が経っているとはいえ、完全に自信が回復していない中、上司の言葉には励まされた。

周囲にも、病歴のことを伝えたが、やはり皆応援してくれた。

「自分には居場所と、必要としてくれる人がいる」

そんな感覚になったのは、がん告知後初めてのことだった。

もう子どもも家族もいなくていい。ここでずっと頑張っていこう。

美咲は、ようやく長く暗いトンネルを抜けようとしていた。

さらに月日が経ち、美咲は36歳になった。転職エージェントでの仕事は6年目を迎えて、今では転職希望者の対応をアドバイザーとして一人でこなせるまでになった。

子どもも産めず、恋人もない美咲は、仕事に自分のすべてを注いできた。というよりも、仕事にすがってきた。土日も、休みを取りたがる同僚の代わりを何度も務めてきた。とにかく走り続けることで、自分の中にいまだ潜んでいる虚無感のようなものを覆い隠そうとしていた。

以前ほど気にはならなくなったものの、友人たちから届く年賀状や、時折目にするSNSからの幸せそうな画像を見るにつけ、自分はこれで良かったのだろうか…とふと我に返ることがある。

良いも何も、生理はいまだ戻ってこないし、職場でカミングアウトしている以上、そんな病歴を持った人間と付き合いたいという男性は簡単には現れないことも分かっている。

同僚たちは、美咲を傷つけることこそしないが、かといってそこまで踏み込んでくることもなかった。あくまでも、仕事上の付き合いだった。

もちろん美咲にも、気になる男性がいなわけではなかったが、乳房も片方なく、子どもも産めない自分に、恋愛する資格はないと決めつけていた。何より、断られるのが怖かった。

6

北海道は、冬の到来が早い。

10月にもなると、早々に気温10度を下回る日が増え、一気に冬支度が始まる。

美咲は、昨年クリーニングに出し、丁寧にしまっていた白のコートをクローゼットから取り出し、そのコートを手に家を出た。

今日は日曜日だ。しかし、美咲は会社へ行く。お客様にはできるだけ平日のご来社をお願いするのが、「キャリアアープ」社の暗黙の決め事になっている。しかし、普段仕事で忙しいお客様にとって、転職活動のために平日に来社するのは簡単ではない。日中はもちろん、夜の時間帯であっても、急に早く帰るとなったら周囲が疑問に思うからだ。

そうなると結局、面接の希望は土日にも入ってくることになる。

当然家族持ちや恋人のいるメンバーは、急な土日出社を嫌がった。もともとシフトに入っている場合はみんな仕方なく空けるが、例えば、当該週の木曜などに、土日の出勤依頼が来ると、みんなでその依頼をお見合いするのだ。

結局、その空気に耐えられず、美咲が手を上げることになる。

「神野さん、いつもすみません。本当に助かります。土日は子どもを病院やら公園やらに連れて行かなければならなくて……」

「ですよ、全然気にしないでください。私の方もその分平日が休みになるので、ゆっくり買い物できたりして助かっています」

美咲は、また嘘をつく。本当は平日が休みになっても何もすることがないので、出社をしている。

とにかくポツカリと予定が空いてしまうことが不安で仕方ないのだ。

この日も、昼過ぎから予約の入っているお客様の相談に2件対応した。

その後、フォローシートを入力していると、オフィスの入り口が開く音が聞こえた。

「お疲れ様です。あつ、やっぱり神野さんいたんですね」

入ってきたのは富樫雄太だった。5年前の入社時に面接してくれた雄太は、大学時代の恋人とはタイプが違い、色白でスマートな体型だ。入社時の親切な対応や分け隔てなく接してくれることから、美咲はひそかに好意を抱いていた。確か美咲の2歳年下と聞いていたから、今は34歳くらいだろうか。雄太はこの9月からこれまでの功績が認められ、シニアアドバイザーに昇進していた。

この会社では、アソシエイトアドバイザー、キャリアアドバイザー、シニアアドバイザー、プロフェッショナルアドバイザーという順に昇進する。

美咲は、正社員登用以来、一番下のアソシエイトアドバイザーのまま。自分なりに頑張っていると思うが、声は一向にかからない。

「あつ、富樫さん。お疲れ様です。休日出勤ですか？」

「はい。ちょっとメンバーからの相談事が溜まってしまっていて……」

「シニアは管理職的な役割もあるから、面倒見るメンバーの数も一気に増えますもんね」

「そうなんですよ。全然慣れなくて……」

「そんなことないです、社内でもみんな富樫さんの下で働きたがっていますよ」

「有り難うございます。神野さんは今日も面接ですか？」

「はい、佐貫さんが初回面談の予定だったんですけど、お子さんのご都合でどうしても難しくなってしまうので、代わりに……」

「神野さんのおかげで、本当にみんな助かっていますよ。でも、神野さんもくれぐれも無理はしないで、平日とかにちゃんと休み取ってくださいね」

雄太は、美咲が平日も休まず会社に来ていることを知ってくれていた。

昇進も果たし、忙しいはずの雄太に労いの言葉をもらい、美咲は気持ちはずんだ。

「有り難うございます。でも、私はこの仕事が楽しいので、全然大丈夫ですよ」

「そうですね、それなら良かったです。入社するとき最初にお声掛けしたのが僕だったので、もし辛いようだったら申し訳ないなと、実は時折感じていたので……」

「覚えていてくれたんですね。そうですね、もう5年も前のことですね」

「そっか。もうそんなに経ちますか」

雄太は、美咲に少し近寄り、無造作に置かれた回転椅子に腰を掛けた。

「ところで、体のほうはその後辛いとかないですか。みんな、神野さんの体のことお構いなしでお願いしてるんじゃないかとそっちも少し気になっていて」

「あっ、そっちの方もおかげさまで問題ないです。もう治療が終わって10年近く経ちますけど、特に再発や転移もないので……」

再発や転移だけでなく、生理も片胸もないですよ、と美咲は自虐的に思ってみたが、口には出さなかった。

「そうでしたか。それは良かったです。そういった込み入った話は失礼な気がして、なかなか聞くに聞けなくて……」

「ご配慮有り難うございます。確かに、告知直後は結構神経質になっていたんですけど、さすがに10年も経つと、病気だったことすら忘れることがあります」

「それは安心しました。あっ、でも言いにくいことは遠慮なく言ってくださいね」

「はい、分かりました。でも、富樫さんとはチームも違うし、普段はすれ違いばかりだったのでこちらも話せて楽しかったです。有り難うございます」

「お互い頑張りましょうね」

そう言うと、雄太は席を立ち、反対側にある自分のデスクへと向かっていった。美咲は、雄太が自分のことを気にかけてくれていることが嬉しかった。確かに最初に面接をしてくれたのは雄太だが、仕事に邁進する雄太の視界から自分は完全に消えていると思っていたからだ。

美咲は、フォローシートを書き終え、パソコンをシャットダウンすると、「富樫さん、では私はこれで……」と挨拶に行った。

「これからはたまに休日も出勤することになると思うので、神野さんとはまた会うかもしれませんね。そのときはよろしくお願いしますね」

オフィスを出て、美咲は深呼吸をした。最後にかけてられた言葉に思わず顔がほころんでしまったことに、雄太は気づいだろうか。一瞬で真顔に戻したが、内心で美咲はガッツポーズをしていた。味気ない休日勤務が、急に視界良好な青空のような印象が変わった。それは、がん宣告後、感じたことのない気持ちだった。

それから、美咲の休日出勤は相変わらずだったが、そのうち半数くらいは雄太も出社してくるようになった。当然、他のメンバーも出社してくる可能性はあるので、毎回二人きりというわけにはいかなかったが、それでも、そうなれる可能性があるというだけで、美咲の日々は色を取り戻した。

11月になり、本格的な雪の季節になった。寒さに比例し、なんとか年内に次の仕事の目処を立てたいという相談者も増えてきて、美咲は、毎週のように休日勤務を繰り返した。

そんなとある日曜日、いつものように面接が終わりフォローシートを書いていると、雄太が息を切らしてオフィスに入ってきた。

「神野さん、今日も来てたんですね」

「富樫さん、お疲れ様です。どうしたんですね？ そんなに急いで」

「さっき僕のお客さんから連絡が入って、内定した企業への入社を断りたいって言ってきてたんです。だから明日、その企業にお詫びするための資料作りをしなくちゃいけないんですけど……。本当はゆっくりメンバーの相談事に対応しようと思って来たんですけどね」

「そうだったんですね、大変ですね……」

「まあ、珍しいことではないですけどね。あと、一人じゃ寂しいけど、神野さんも来てくれていたから」

「えっ……」

美咲は、雄太の真意を図りかねた。今の雄太の発言を、どう捉えたらいいのか。美咲は、当たり障りなく答えた。

「……何かお手伝いできることがあれば、書類作成くらいはできるので、遠慮なくおっしゃってくださいね」

「有り難うございます。そうしたら一つお願いさせてもらってもいいですか？」

「はい、私にできることなら」

「今日、この後、17時くらいまで仕事しながら待っていてほしいんです。その後、良かったら夕飯でも一緒にと思って。あっ、もちろん予定あったら全然大丈夫なんですけど」

「あっ、予定は全然ないんですけど、でも、富樫さんお忙しいんじゃない……」

「部下の相談事は明日朝来てやることにしました。今日はとにかく明日の謝罪用資料づくりに専念して、17時までには終わらせようと。ただ、あんまり気の進む作業じゃないから、神野さんが待っていてくれると張り合い出るなと思って……」

美咲は、自分が雄太の力になれるなんて思ってもみなかった。がん宣告以来、ここでの仕事を通じてお客様の役に立ってきた自負があったが、一人の人間としてはまだまだ自信は回復できていなかった。眞知子と夕食をとにもする予定だったが、美咲は即答した。

「あっ、予定ありません。なので、17時まで仕事して待っていますね」

「本当ですか。良かったです。これでこの仕事頑張れそうです。よし、やるぞ！」

子どものような気合いを入れた雄太を可愛いと思った。そして、自分の中にある雄太への想いも再認識した。その後、美咲は、眞知子に今夜は遅くなることを伝え、2時間ほどモニターの画面を見ていたが、もはやその内容はまったく頭に入ってはこなかった。

「神野さんって、普段やってる趣味とかあるんですか？」

「いえ、昔はいろいろとやってたんですけど、病気になってからはあまり趣味らしい趣味もなくなってしまっ。しいて言えば読書とかですかね。富樫さんは？」

「僕はスノーボードですかね。最近は忙しくてなかなか行けてないですけど」

「スポーツ、いいですね。私、北海道育ちなのにスキーとか下手で……」

「スノーボードなら今からでもうまくなれますよ。今度、時間できたら一緒に行きますか？」

「えっ、でも富樫さん、最近忙しいって」

「そのときは、今よりもっと早く仕事片付けて、時間作りますんで」

「そんな、そんな。でも、スノーボードやったことないんで、足引っ張っちゃうかも…」

「僕、こう見えても、若い頃はインストラクター目指していたこともあったくらいで、教えるのは嫌いじゃないんです。最初はうまく滑れなかった人が、滑れるようになったときに見せる嬉しそうな顔を見るのが好きなんですよね」

「だったら、今度お願いしようかな」

「了解！　じゃあ、この冬、ぜひ行きましょう」

美咲は夢の中にいるような気分だった。気になっていた雄太から食事に誘われ、雰囲気の良いイタリアンで、楽しい会話に興じている自分。孝太郎と別れて以降、何もなかったのが嘘のように、楽しい時間を過ごすことができた。

プライベートの連絡先を交換し、今後は土日の出勤日を合わせるようになった。雄太は社内でも人気があるので、このことは秘密にしなければならぬ。

さらに美咲には一つ不安があった。2つの隠し事を雄太に伝えたとき、雄太が離れていってしまうのではないかということだ。一つは片胸がないこと。もう一つは生理が戻っていないことだ。

胸に関しては、もうこの先誰かと一緒になることもないだろうからと、再建に踏み切らなかつたため、今も手術直後のまな板のような状態のままだ。

また、生理に関しては、いつか戻るかも…と淡い期待をしつつも、気づけば9年以上経過していた。

一度、高校時代の友人に、そのことを話してみたことがあるが、「いいなー、私生理痛すごいから、正直羨ましい」と嫌味を言われてからというもの、人には言わないようにしてきた。

出会いがなければこのままでいいと思っていたものが、今、美咲にとって不安の種になりつつあった。雄太のことはあまり深入りしすぎないようにしたほうがいいんだろうな。

美咲は、自分の心にブレーキを踏んだ。

しかし、そんな美咲の思いとは裏腹に、雄太はこまめに連絡をくれるようになり、食事を一緒にする回数も増えていった。

美咲の体を気遣ってか、すぐに付き合っほしいとか、体の関係を求めたりということはないが、それでも会話の端々に将来のことを匂わせる話題が出てきた。雄太は、慎重にも温かい家庭を築いていきたいのだという。そして、それは恐らく子どもがいる家庭だ。

自分には無理だ、と先手を打とうと思ったが、なかなかそのひと言は口に出せなかった。

せっかく手にした夢のような時間をもう少しだけ味わっていたかった。いつかはなくなるかもしれないけど、もう少しだけ……。

クリスマス・イブは金曜日だったので、二人はお互い時間をずらしてオフィスを出た。そして、約束していたホテルで落ち合い、デイナーを共にし、その後、最上階のバーに移動した。

さすがにこうなると雄太の気持ちがあることは間違いない状況だった。

ただ、9年間の恋愛ブランクのある美咲は、なかなか自分からは踏み込めなかった。カウンターに横並びで座り、雄太がウイスキーの水割りを頼み、美咲はカシスソーダを頼んだ。

その後、お互い同じものを追加したところで、雄太はバッグから小さな箱を取り出し、「これ、クリスマスプレゼント」と言ってみて、美咲に渡した。

美咲は、「実は私も……」と言って、先週末に百貨店で購入したネクタイが入った横長の箱を雄太に渡した。

雄太は驚き、そして箱を開けて、早速自分の首元に当てた。紺と黒のストライプ柄のネクタイは、美咲の想像以上に似合っていた。

「僕のも開けてみて」

美咲が小さな箱を開けると、そこにはゴールドのネックレスが入っていた。

「こんな高そうなもの、いいんですか？」

「彼氏でもないのに、出しゃばっているかもしれないけど、良かったら神野さんに付けてもらいたくて」

「そんな、出しゃばっているだなんて。有り難うございます」

「ちょっといい？」

そう言ってみて、雄太は、ネックレスを手に取り、美咲の首に回した。

「やっぱり思っていたとおりだ。よく似合ってる」

「本当ですか？ 嬉しいです」

「そう言ってもらえてよかった。本当は指輪を買おうと思ったんだけど、さすがにちょっと今は重いかなど。でも僕、神野さんのこと本気なんで……」

「えっ」

「いや、だから、あの……」

そう言ってみて、雄太はバーテンダーが置いてくれた水割りを一気に飲み干し、言葉を続けた。

「神野さんのこと本気なんで、僕と付き合ってもらえないかな。返事は今日じゃなくてもいいから」

「えっ、でも、私の体のこと気にならないんですか？」

「もちろん、神野さんが気にするのは当然だと思うけど、僕は全然気にしてないよ。神野さんの真面目で一生懸命なところに惹かれたんだから。神野さんがずっとうちで頑張っているのを見てきて、僕は内心随分と励まされてきた。病気になるっていろいろと大変だっただろうに、そんなこと言い訳にせず、土日も含めて頑張っている。役職だって、他のメンバーに比べて上がりにくいのに、それでも腐らずやっている。そんな姿に、勇気づけられてきたんだ」

「そんなの全然知らなかった」

「だって言ったことなかったから。でも、全部本当のことだし、僕は本気だから」

「有り難うございます。本当に嬉しいです。でも、ちょっとだけ時間をもらってもいいですか？ 富樫さんは申し分のない人だし、私にはもったいないくらいの人だと分かっています。でも、やっぱり、私の場合、普通の人とはちょっと違うから」

「もちろん、今日返事をくれなくても大丈夫。これまでずっと待っていたんだから、今更ちょっとくらい先になっても全然平気。ゆっくりと考えてよ。ということで、言いたいことは言い切った！ さあ、今日は飲むぞー」

雄太は、急に吹っ切れた様子になり、水割りをお代わりした。

そんな雄太の横顔を美咲はいつまでも見続けていたいと思った。

7

クリスマス・イブに雄太に告白されてからというもの、美咲はこの幸せがいつ壊れるかと不安で仕方がなかった。

もしここで彼の申し出を受け止めた場合、さすがに2つの隠し事をそのままにしておくわけにはいかなくなる。でも、それを伝えたら、恐らく雄太は去ってしまうだろう。胸のことはまだしも、生理については許容できないはずだ。

これまでは幸せに蓋をして何とか日々を生きてきた。でも、今、その蓋を開こうとしている自分がある。でも、そこを開いてしまうことで、今まで以上の不幸を招いてしまう可能性もあった。

美咲は、数日間、悩みに悩んでいた。

そんな年末の押し迫った時期の夜、美咲のもとに一本の電話が鳴った。

見たことのある電話番号からだ。でも、そのままやり過ぎした。

しかし、電話はもう一度鳴った。間違いない、孝太郎だ。

あれほど一人の人間とやり取りしたことはかつてなかった。そして、その後、一度として連絡が来たことはなかったし、こちらも電話帳から番号を削除していた。たまに思い出

すことはあったが、奥さんと子どもたちと幸せに過ごしているんだろう、と勝手に思っていた。

その孝太郎が今頃なんの用だろうか。

美咲は、恐る恐るボタンを押す。

「はい、もしもし」

「……あっ、あの…、神野美咲さんの番号ですか？」

「そうですけど……」

「よかった。俺、孝太郎。久しぶり」

やはり孝太郎からだった。しかし、かつてのハキハキした印象は微塵も感じられず、くぐもった覇気のない声だった。一人で酒でも飲んでるのだろうか。

「うん、久しぶり。10年ぶりだね」

「もうそんなに経つのか。あれから元気にしてるか？」

「うん。再発もなく、元気にやってるよ」

「そうか。それなら良かった。結婚は？」

「してない。そっちは？」

「俺？ 俺の方は……してたけど最近別れた」

「えっ、そうなの？」

幸せそうに暮らしていると思っていたので意外だったが、それによって暗いトーンの理由が分かった。

「うん、美咲と別れて3年くらいした後、会社関係の女性と結婚したんだ。ただ、それから5年以上子どもに恵まれなくて。奥さんは、数年前から仕事しながら不妊治療に取り組んでいたんだ……」

「うん……」

「でも、それでもどうしてもうまくいかないということで、俺の方も調べることになったんだ。そしたらさ、まさかなんだけど、原因は俺の方だったんだ。俺、子ども産む能力がなかったんだよ」

美咲は、言葉を返せずにいた。

「で、奥さんと話し合った結果、奥さんのほうも決して万全ではないものの、俺といえるよりは可能性を模索したいということで、離婚することになったんだ……」

泣いているのか、孝太郎は言葉に詰まっている。

「孝太郎くん、大丈夫？」

「……自分から電話しといてゴメン。で、俺、美咲に対して、すごい申し訳ないことしたなと思って、ずっと謝りたくて……ヒッ、ヒッ、ヒッ……。自分が子どもを持てなくなったことが分かって……ヒッ……、ようやく当時の美咲の気持ちを理解できるようになるなんて遅いんだけど、でも謝りたくて……ヒッ、ヒッ、ヒッ……」

「私の方は大丈夫だから泣かないでいいよ。自分を責めないで。それに、孝太郎くんだって辛い気持ちだろうし」

「……やっぱり、自分の子どもが持てないって分かった瞬間は絶望的でき。それに加えて離婚だろ。奥さんが出ていった家で、やることないから酒ばかり飲んでるんだ……」

「仕事はどうしてるの？」

「最近はず勤が続いちゃってる。会社関係の奥さんだったから、離婚のことも伝わって、働きにくいんだわ。このままいくと、退職するしかないかもな」

20代の頃はあんなに頼りがいのある男だった孝太郎が、今は吹けば飛んでしまいそうなほど弱々しくなっている。

過去を許せない気持ちは抱きつつも、美咲はそんな孝太郎を放っておくことができなかつた。

「……私たち、別れちゃったけど、孝太郎くんとはもともとは恋人同士だったわけだし、これからも幸せになってほしい。だから、今何か私にできることある？」

孝太郎からは返事がない。

「孝太郎くん、聞こえてる？」

「……ゴメン、聞こえてる。でも、ここで美咲に甘えるなんて汚いよな。もともとは俺の気持ち離れたわけだしさ」

「今はもうその話はいいから。何かできることある？」

「……今、どこにいるの？」

「私、あれから実家に帰ったんだ。だから北海道」

「……じゃあ、こっちは来れないか……」

美咲は、迷った。今はまだ雄太にどのように返事をするか悩んでいる状態だ。なのに、孝太郎に会ってしまったら、余計に雄太への返事のことと悩みが深くなってしまいうような気がした。

でも、この電話の奥のすすり泣いた声を聞くと、当時の楽しかった思い出が蘇り、何とかしてあげたいと思ってしまう。

「……分かった。年末年始は仕事休みだから、ちょっとだけけどそっちに行く。だから住所を教えて」

「えっ、いいのか？」

「うん。だって、今の状態の孝太郎くんは放っておけないし、私も子ども産めなくなった辛さは分かるしさ」

「……有り難う、美咲。住所は……」

美咲は、孝太郎の口から発する住所をメモしながら、内心雄太に言い訳をしていた。

ごめんなさい、富樫さんと付き合いたいと思ってるけど、今はどうしても孝太郎くんを放ってはおけない。この問題を解決したら、必ず返事するから……。

クリスマス・イブの告白以降、雄太は、毎日のように美咲からの返事を待っていた。スマホを肌身離さず持ち続け、バイブ音がするたびに、画面に釘付けになった。

早い段階で良い返事が来たら、年末年始も一緒にいれると思っていたが、どうやら返事はなさそうだった。

やはり、体のことを気にしているのだろうか。雄太はたとえ美咲がこの先も体にハンデを抱えていても、ずっと支えるつもりだし、たとえ子どもが産めない体だったとしても、受け止めるつもりだった。

自分からはそのことを伝えることはできなかったが、美咲から打ち明けてくれれば、それら事実をすべて受け止め、一緒になるつもりだ。

だから、何でもいから早く返事が欲しかった。

しかし、28日になっても返事がなかったので、雄太はたまたま美咲にLINEをした。

「年末年始は実家で過ごす予定？ 良かったら初詣一緒に行かない？」

しかし、返ってきたのは、想定外の回答だった。

「富樫さん、まだ返事できずにごめんなさい。必ず返事するのでもう少し待ってもらえますか。あと、年末年始はちょっと北海道を離れるので、初詣は一緒に行けないんです。本当にごめんなさい。良いお年を」

気持ちが昂ぶっていた雄太にとっては、少々こたえるメッセージだったが、雄太はグツと堪え、年末年始休暇を返上して仕事をする決意を固めた。

約10年ぶりの東京。もうここに戻ってくることはないと思っていた。

空港から電車で都内に向かった美咲は、まず自分がかつて住んでいた荻窪のマンションに立ち寄ってみた。当時の面影ははつきりと残っているが、その面影とともにここを出ていくときの例えようなない無力感が襲ってきた。ふとその無力感に占拠されそうになったが、深呼吸をしてもう一度記憶を呼び戻すと、孝太郎と楽しいひとときを過ごした時間も思い出されてきた。

初めて家に孝太郎を招き入れた日のこと。お揃いの歯ブラシ。誕生日のお祝い……。そこには確かに幸せな日々が存在した。最終的に別れることになったとはいえ、それらの日々まで否定することはないのではないか。

美咲は、少しだけ気持ちが軽くなり、勢いそのままに孝太郎から教えてもらった住所のある駅に向かうため、電車に飛び乗った。

孝太郎が指定する住所の一軒家には、「初瀬」という表札が掲げられていた。

郊外とはいえ都内の一軒家ということで、決して大きくはないが、白を基調に、バルコニーでくつろげるようになっていたり、庭にウッドデッキが置かれていたり、外から見ても分かるくらい、ところどころに孝太郎のこだわりらしい工夫が施されている。

そして、それらはきつと本来産まれてくるであろう幼な子と妻のために作ったに違いなかった。その夢が、自分のせいで叶わぬものとなり、今はそこに一人で暮らす虚しさを想像し、美咲は胸が苦しくなった。

もしここで孝太郎と会ったところで、自分にできることなどないのではないか。ここまですべて来て、美咲は急に怖気づいた。しかし、自分自身、夢を失った経験を持つからこそできることもあるはずだ、と気持ちを奮い立たせた。何よりも、一度は結婚まで決めた相手にもう一度会って見たかった。

「ピンポン」

思い切って、インターホンを鳴らしたが、反応はない。

今日の午後3時頃に着くように向かうと言っておいたので、美咲だということは分かっているはずだ。

再度インターホンを押すと、鍵を回す鈍い音とともに、孝太郎が玄関から出てきた。

しかし、それはかつて美咲の婚約者だった彼ではなく、白髪交じりのボサボサ頭に、無精髭を蓄え、50代間近と思うくらい老けこんだ中年男性だった。グレーのスウェットの上下は、ラフというよりも、だらしなさを際立たせていた。何よりも、酒臭かった。

「おー、美咲。久しぶりだな。待ってたよ」

「久しぶり。孝太郎くんも元気そうね」

「おう、この通り、なんとか生きてるよ。さあ、上がって」

他人の家に上がるのはなんとなく気が引けた気持ちになるが、孝太郎はすでに離婚しているという事実が美咲の気持ちを幾分楽にさせた。

しかし、リビングに通されると、かつての恋人を招き入れるには失礼ではないかと思うほどに散乱していた。ビールや酎ハイの空き缶、お菓子の袋、惣菜のパックのゴミなどがそこら中に散らかっており、軽い異臭を放っていた。台所も、何週間もそのまま放置されているような食器たちで埋まっていた。

「孝太郎くん、これどうしたの？」

「……えっ。どうしたもこうしたも、一人で暮らしたことなんてこれまでなかったから、どうやって片付けていいのか分からなくてさ」

そう言って孝太郎は、グラスに入った液体をぐいっと飲み干した。氷が溶け、生温くなったウイスキーだろう。昼からこうして毎日飲んでくれているのだろうか。

孝太郎は元来キレイ好きだったはずだ。美咲の家でも、自分が出したゴミはきつちりと処分していたし、食器だって洗ってくれていた。奥さんに出ていかれたことで、ショックを受けて、何もかも面倒になってしまったのだろうか。

「そっか。そしたらまず私の方でちょっと片付けするから待ってて」

「あっ、そう。悪いな」

孝太郎は悪びれる素振りもなく、手に持っていたグラスに、またウイスキーを注ぎ始めた。

「孝太郎くん、ちょっとお酒飲みすぎじゃない？」

「いや、大丈夫。久々に美咲と会えたから嬉しくてさ」

「それで最後にしようね」

そう言いながら、彼は絶対にまだ飲み続けるだろうと確信した。とにかく早く部屋を片付けよう。部屋がきれいになれば孝太郎も気持ちを引き締められるかもしれない。急いでゴミを一つにまとめ、外のダストボックスに入れ、台所の食器を洗った。

30分ほど時間がかかったが、ある程度の見栄えにはなった。ただ、酒の臭いだけはいかんともしがたかった。

「孝太郎くん、お待たせ。だいぶキレイになったよ」

「おっ、美咲。ありがとな。そしたら一緒に飲もうぜ」

「もうこれ以上飲まないほうがいいよ。体に悪いよ」

「どうせもう生殖能力もないんだし、仕事だっけで行けなくなっちゃったし、これ以上体が悪くなっちゃって変わらないでしょ」

孝太郎は人生を捨てたように言い放った。

酒こそ飲まなかったが、美咲にもこんな時期があった。片胸を失い、妊よう性を失い、恋人を失い、仕事を失い、北海道の実家で自暴自棄になっていた。だからこそ、孝太郎の気持ちは痛いほど分かった。自分を捨てた男だが、同時に自分が愛した男でもある。こんな姿は見えていられない。

「孝太郎くん、今辛いよね。気持ち、理解できるよ。今の私に何かできることあるかな」

「……美咲、いつまでこっちにいられる？」

「年明けから仕事が始まるから、長くて3日間かな」

「だったら、その間うちに居てもらえないかな？俺今心細くて仕方なくてさ。でも、この気持ち分かってもらえるの美咲しかいなくて」

「……分かった。そしたら近くにホテル取ってるから、朝来て、夜には帰るね」

「えっ、そうなの。うちに泊まっていけばいいじゃん。年末年始だし、ホテル高いでしょ」

「ううん。孝太郎くん、離婚しているけど、その辺は一応ケジメつけないと」

「大丈夫だよ。っていうか一緒にいてくれないかな。頼むよ。夜、眠れなくて怖いんだよ。3日間だけでいいから」

孝太郎にそこまで言われてしまい、美咲は断りきれなかった。一瞬、雄太のことが頭をよぎった。

「分かった。じゃあ、今日だけ」

「本当？有り難う。じゃあ、今日はもう酒やめるよ」

「そうだね。飲み過ぎは良くないから」

美咲は、孝太郎のグラスを台所に持っていった。

美咲が泊まると言ったことに安心したのか、台所の片付けが終わり、美咲が振り向くと、孝太郎はソファに横になり、いびきをかき始めていた。久々に見る孝太郎の寝顔。20代の好青年だった頃のみずみずしさはないが、よく覗いてみると、やはり孝太郎の精悍さの名残は感じられる。

この旅はこの先、どこに向かっていくのだろうか。

雄太にはまだ返事はしていないが、この体さえ受け入れてもらえるのなら雄太と一緒にいたいと思っていた。

なのに、その矢先に、孝太郎のこんな姿を見せられ、気持ち揺れ動いた。今好きなのは間違いなく雄太だ。しかし、その気持ちとは別な部分で、美咲の心はゆらゆらと動いている。これまで10年間、本当に何もなかったのに、人生とはどうしてこんなに試練を与えてくるのだろうか……。

気がつくと、孝太郎の足のあたりを枕にして、美咲もウトウトしていたようだ。

リビングに差し込む西陽が、色濃さを増してきている。

「うっ……ちよつと寝ちゃったかな。ゴメンゴメン」

孝太郎が目覚ました。

「ううん、私もちよつと疲れちゃったみたい。少しウトウトしてた」

孝太郎と目が合った。少し酔いが冷めたのか、孝太郎の目は以前の鋭さを取り戻していた。

「美咲、俺、今回のことがあってから、本当にお前に申し訳ないことをしたと反省した。だから、それを謝りたかったんだ。そして、今さらこんなこと言えた義理じゃないけど、美咲さえ良ければもう一度やり直せないかと思ってる」

何を今さら……美咲は、それまで感じていた孝太郎への思いが、同情的なものから、嫌悪に変わったのが自分でも分かった。

子どもの産めない私から離れておいて、自分が同じ立場になったと分かったら、今度は寄りを戻そうとする。都合良く私を利用しようとしている。

「ゴメン、私そういうつもりで来たんじゃないから。だったらもう帰るね」

「おい、待てよ。そういうつもりって何だよ。お前だってこれまで苦労してきたんだろ。俺たち、似たもの同士、分かり合えるはずじゃないか」

『似たもの同士』という言葉にカチンときた。

「私はあなたに捨てられ、仕事も失い、何年も暗い穴に落とされた気持ちだったけど、何とかして自分で這い上がってきたの。新しい仕事にも就き、新しい人間関係を築き、なんとかまたスタートラインに立ってる状態まで来た。なのにあなたは子どもが産めなくなっ

て、仕事がうまくいかないからって、都合良く同じような境遇にあった私と復縁しようとして、ちょっと自分勝手すぎるわよ！ バカにしないでよ！」

これまで人にこんなに強く当たったことはなかったが、美咲の怒りは収まらなかった。親にすらぶつけられなかった10年分の怒りを今、孝太郎にぶつけている。それは、孝太郎にぶつけているようで、自分が散々跳ね返されてきた社会にぶつけているようでもあった。

我に返った孝太郎は、「……そうだよな。都合が良いよな。申し訳ない……」と侘びた。

「……でも、俺もどうしていいか分からなくて……。美咲は、なんでそんなにいろんなものを失ったのに、ここまで頑張れたの？」

孝太郎の目には涙が浮かんでいる。美咲は少し考えてから話し始めた。

「……私も全然最初は頑張れなかったし、こんな状態で生きていくくらいなら、死んだ方がマシなんじゃないかと思ってた。街で子どもと一緒にいる親子のことを憎らしく思ってしまったり、仕事バリバリ頑張っている友だちを羨んだり、毎年届くみんなからの幸せいっぱいの写真が付いた年賀状をビリビリに破いたこともあるよ。でも、そんなことしても、何も解決しなかったし、自分と同じような環境でも腐らず頑張っている人もいて、そういう人を見ていると、あー、自分だけが苦しいんじゃないんだって、みんな人知れず悩みを抱えているんだって思えたの。だから孝太郎くんも、今は死ぬほど辛いかもしれないけど、きつといつか立ち直れる日が来ると思うから諦めないでほしい」

「……そうかな。俺はやっぱダメだよ。仕事ももうすぐクビになるだろうし、本当に何もかも失っちゃったよ……」

「そんなことないよ。私だってまだまだ生きていくから、お互い頑張っていこうよ」

「美咲、今日だけ、今日だけでいいから、やっぱり一緒にいてくれないか。明日から俺、頑張るから……」

孝太郎のすがるような顔を見るのは初めてだった。一日だけ、そうたった一日だけだ。雄太だつてきつと理解してくれる。

「分かった。今日は孝太郎くんのそばにいるわ」

「美咲、本当にすまない。そして有り難う……」

孝太郎が美咲に体を預ける。そして、美咲は、そんな孝太郎を受け止める。

こうして二人は約10年ぶりの夜を共にした。

翌朝、孝太郎が起き出す前に美咲は、身支度を済ませ、玄関を後にした。

昨夜はあれからずっと一緒に孝太郎のベッドの中にいた。

子どもに戻ったように甘える孝太郎を、母のように優しく抱きしめ、そして、孝太郎の求めに応じた。

再建をしていない片胸を見て、孝太郎はまたしても泣き出した。時が流れ、乳房再建に保険が適用できるようになったことで、てっきり美咲は再建したものと孝太郎は思っていたようだが、今もなお10年前に切除したままだったことに驚いていた。

「美咲、ずっとこの胸で頑張ってきたんだな。それに引き換え、俺はなんて弱いんだ……」

嗚咽の止まらない孝太郎を、ぎゅっと抱きしめる。

「そんなことないよ。私だっけずっと弱かったんだから……。孝太郎くんもきつと大丈夫」

「美咲……」

「孝太郎くん……」

こうして二人の夜は過ぎていった。

そんな夜を振り返ることもなく、美咲は予定を繰り上げ、その日のうちに北海道に帰ることにした。

ここに留まっていたら、きっと自分は孝太郎と離れることができなくなってしまう。孝太郎が美咲を求めると同様、美咲の中にも孝太郎を求める気持ちが無意識ながら芽生え始めていた。

生殖能力を奪われたもの同士、目の前の相手に逃げられたもの同士、仕事の目標を奪われたもの同士、そうしたさまざまな経験がシンクロする今、孝太郎は美咲にとっても居心地のいい相手になるだろうことは容易に想像できた。

自分の生理が来ないことを責める必要も、後ろめたい気持ちも抱かずに済む。

でも、美咲は、それじゃいけない気がしていた。今、それを決めるのはいけない気がした。やはり、北海道で待つ雄太に本当のことを伝えなければならぬ。そのうえで、雄太はどんな返事をするのか。それを聞かずして、孝太郎と一緒にいることはできない。

9

「明けましておめでとうございます。少し早く北海道に戻ってこられました。もしまだ間に合うようなら、初詣、一緒に連れて行ってもらえませんか？」

雄太のスマホに、美咲からの連絡があったのは、元日の夕方だった。

正月返上で、仕事の企画を練っていたところにやってきたメッセージ。

雄太はやる気持ちを抑えながら指を動かした。

「明けましておめでとう。帰り待ってました。こちらはいつでも大丈夫です。神野さんの都合に合わせてます」

この数日間、雄太は内心不安で仕方がなかった。告白した後、連絡もなく、さらには北海道を離れたという美咲。もしOKならそんなことするだろうか。それとも、何か自分言いづらいことを抱えているのだろうか。

美咲のことを知っているようで、実は何も知らなかったことに気づかされた。そして、自分が思っていた以上に彼女の存在が大きくなっていったことにも……。

美咲から1月3日で提案が来た。この日に何かしら話があるだろう。雄太は覚悟を決めた。

「初詣に連れて行って言うから、てっきり着物を着てくると思ってたのに……」

「ちょっと考えたんですけど、やっぱり恥ずかしくなっちゃって……」

「神野さんの着物姿見たかったけど……で、年も明けたことだし、会社の外ではもう敬語使うのやめようよ」

「はい、分かりました……。あつ、うん、分かった、だね」

久々の雄太との会話に、美咲は少し緊張している。そして、今日はその2つの秘密も打ち明けるつもりだ。雄太の反応は確かに怖い。「そんなの聞いてなかった。だから告白は取り下げてほしい」そう言われたとしても仕方がないと思っていた。でも、いざれ分かってしまうことなのだから、言うなら早いほうがいい。

状況はどうあれ、孝太郎が今の自分を求めてくれたことが、美咲にわずかながら自信を与えてくれた。

美咲は今日、もう一つ覚悟を決めていた。もし雄太がこんな自分でもいいと言ってくれるなら夜と一緒に過ごそうと思っていた。

初詣に行き、その後デパートの初売りでショッピングを楽しみ、夕食を取るために、個室のある懐石料理屋に行った。ここで美咲は秘密を打ち明けるつもりだった。

まずはビールで乾杯し、その後、二人して日本酒を飲みながら、次々と運ばれてくる料理を楽しんだ。

雄太は年末年始は仕事に専念しようとして、いろいろな企画を考えていたことを、少し冗談混じりに美咲に伝えた。

「……で、せっかくあと少しで良い企画が出そうなタイミングで、神野さんからあの連絡きちゃって、そしたらアイデアが全部吹っ飛んじゃったよ」

「ごめんね。そしたら、帰ってきたこと知らせなければ良かった……」

「うそ、うそ。仕事はもうバッチリ終わらせたから安心して。それより、北海道離れてどこか行ってたの？ 家族旅行？」

「ちよっと一人旅にね。富樫さんからああいうふう言ってもらって、返事する前にいろいろと頭の中整理したかったから」

「ということは、だいぶ頭の整理はできたってこと？」

「ええ。今日はそのことを伝えに来たから」

雄太は身構えた。OKなのか。ダメなのか。ダメだとしても簡単に引き下がるつもりはない。

「うん。じゃあ、聞かせてもらおうかな」

雄太は箸を置き、改まって座椅子の上に正座をした。

一瞬の静寂の後、美咲がゆっくりと口を開いた。

「クリスマス・イブの日に富樫さんから告白してもらって、私とても嬉しかった。5年前に初めて面接してもらってから最近まで、遠い存在ながらも富樫さんには憧れていたから。そんな人と仲良くなれて、ああいうふうに言ってもらえて本当に嬉しかった」

「うん」

「これまで乳がんのことを知っている人から、告白されたことなんかなかったから、こんな私でいいのかなって」

「もちろん。それも含めて神野さんと一緒にやっていけたらと思ってる」

「でね、そのことなんだけど、実はまだ話してないことがあって……」

「うん」

「……実は私、左胸がないの。乳房を全摘出して、それから再建してないから、胸が片方平べつたいの。今はブラジャーと補正パット入れているから分からないと思うけど、裸になったらきつと驚くと思う」

「うん」

「うんって、気にしないの？ 胸が片方ないんだよ」

「もちろん、気にしないわけじゃないけど、でもそういう可能性はあるかもと思っていたし、そういうところで神野さんを判断したりはしてないから、俺」

「……有り難う」

「で、話は終わり？」

「ううん、もう一つ。もしかしたらこっちのほうがショックが大きいかも……」

「うん」

「実はね、実は私……生理が来ない体なの」

「……」

「10年前の治療で抗がん剤治療をして、それから生理が来なくなってしまった……。もちろん戻ってくる可能性はゼロではないけど、10年間ないから内心諦めてる。仮に戻ってきて、年齢的に厳しくなってくるだろうし。だから、私と一緒に戻っても、富樫さん、将来子どもが持てないと思うの。どう、それでもまだ付き合おうって言ってくれる？」

美咲は、強気に言ってみた。今の孝太郎ならまだしも、普通の男性なら、これはさすがに受け入れられないに違いない。でも仕方ない。これが自分の運命なんだ。

「とても言いにくいことを話してくれて有り難う。これまでずっと辛かっただろうね。でも、俺は神野さんの体がどのような状態であれ、神野さん全部を好きになったわけだから、気持ちは変わらない。もう一度言うね。俺と付き合ってほしい」

雄太に優しくそう言われた瞬間、美咲は溢れるものが止まらなくなった。これまでずっと抱えていた大きな荷物をやっと降ろせたような、そしてその荷物を一緒に抱えてくれる人がやっと現れたのだ。

「……有り難う……。でも、本当に私なんかでいいの？」

「もちろん。だって、告白したのはこっちのほうだよ。結婚を前提に付き合ってほしい」

美咲はメイクが崩れるのも気にせず泣きに泣いた。途中で店員がそれに気づき、ボックスティッシュを置いていってくれた。

あまりにも泣き止まないの、雄太は美咲のそばにより、肩を抱き寄せ、背中をさすり続けた。

こうして美咲はこの日、雄太と結ばれた。

一瞬、孝太郎のことが頭をかすめたが、自分の都合で美咲を求める孝太郎と、美咲を無条件で愛してくれる雄太では、比較すべくもなかった。

美咲と雄太はひとまず会社の人間には黙って付き合うことになった。

美咲と雄太が付き合い始めて3ヶ月が経った。二人はお互い惹かれ合い、自然と交際を続けている。

美咲にとっては、これほどの幸せはがん罹患後考えられなかったし、一生やってこないと思っていた。何もかもなくし、自分の力で這い上がってきた。これからも一人でやっていくつもりだった。でも、そこにすべてを受け入れてくれるパートナーが現れたのだ。

美咲は近々、保険適用された乳房再建にチャレンジしてみようと考えていた。雄太が求めているわけではない。雄太は今のままの美咲を愛してくれている。ただ、だからこそ自分としても一歩踏み出してみようと思ったのだ。

もしかしたら美咲は、ありのままの自分を受け入れてくれる人を探していたのかもしれない。それこそが雄太だった。

年末に会って以降、孝太郎からはたまにメールが入ってきていた。会社はやはり退職することになったが、病院に通いながら酒の量は少しずつ減らし、元の生活に戻り始めていくらしい。また美咲が都内に来ることがあれば友人として会いたい、とも言ってきたが、すでに状況はあのとときは変わっている。美咲は、今、雄太の恋人なのだ。しかし、そのことが美咲に一抹の不安を感じさせていた。

付き合う前とはいえ、孝太郎と一夜を過ごしたことが気になっていた。彼がまた調子を崩した際、またそのことを求めてくるのではないか。

5月に入り、桜が散り、新緑の季節を迎えた頃、雄太と公園でデートをしている美咲のもとに、孝太郎から電話が入った。

「ん、電話？」

「あー、これ、迷惑電話。最近知らない番号から多くて」

「俺も。気持ち悪いよな」

そういつて美咲はごまかしたが、孝太郎からの電話は多いときは日に5回くらいかかってくるようになった。

電話に出ないと、今度はメールに切り替わる。

「最近、電話に出てくれないね。俺がどうなってもいいんだ……」

「体は元に戻ったけど、仕事が全然決まらない。もう10社断られた……」

「美咲がつかないから、また酒を飲み始めようと思います」

こんな、本心が美咲の気を引くためか分からないようなメッセージが毎日のように届いた。

確かに、できることがあつたらサポートするとは言ったが、それは雄太と付き合い前のことだ。もちろん友人としてであれば向き合うこともできなくはないが、恐らく孝太郎は美咲を女性として求めている。今となつては、孝太郎は美咲にとって煩わしい存在になっていた。

「孝太郎くんのは心配だけど、北海道にいるし、仕事も忙しいからなかなか会いに行けなくてごめんね」

「仕事、なかなか見つからずに辛いよね。私も仕事できなかった時期があるから辛さ、よく分かるよ」

「体心配だから、お酒はできるだけ控えてください」

雄太と別れてから、まとめてメールを返すが、返すとまた返信が来て、エンドレスなやりとりになってしまう。

いつそ雄太の存在を伝えてしまおうかとも思うが、それはかえって孝太郎を逆撫でしてしまうと考えてやめた。

いつの間にか、社内で雄太と美咲が付き合っていることが知れ渡っていた。誰が言い出したのかは分からないが、それほど人数が多くない支社の、しかも地方都市での付き合いなので、どこかでデートしているのを見られていたのかもしれない。

「結婚しようか」

土曜日のホテルの一室で、雄太はふいに美咲にそう告げた。

「みんなにもバレちゃったし、だったらいつそ祝福してもらおうよ」

「えっ、でも雄太くんはいいの？」

「いいのも何も、俺から告白したんだから」

美咲はついに10年越しに再度プロポーズを受けた。前回は子どものことで捨てられたが、今回は違う。すべてを受け入れてくれる人と家族になれるのだ。

「美咲は、俺が本当は子どもを欲しがってるんじゃないかって思ってるかもしれないけど、そこは全然気にしてない。逆に美咲が望むなら、今は養子や里親の制度もあるから、子どもを育てることはできるしね」

美咲は、ハッとした。今まで考えたこともなかった。自分で産むことばかり考えて、劣等感に苛まれてきたが、産めなくても育てることはできる。そして、それを受け入れてくれる人がいる。

「雄太くん」

美咲は雄太に身を寄せ、涙を流した。雄太にはそれですべてが理解できた。

昨年末、美咲が来てくれてから、孝太郎はなんとか自分なりに頑張って生きてこれた。医者にかかって酒をやめ、会社をやめ、新たな仕事を探した。でもなかなか自分の希望する住宅販売の営業マネージャーとしての条件では内定が出ない。

半年近く取り組んでみたが、内定が取れたのは、いち営業マンとしての1社のみ。プライドを捨てて一からやり直せばいいものの、生殖能力を失った孝太郎は、これ以上自尊心を傷つけられることに耐えられなかった。

そのうち孝太郎は、職探しを諦め、また酒に溺れるようになってしまった。そして、自分がこんな状態に戻ってしまったことを美咲のせいにした。

あいつさえ、俺のもとにいてくれさえすれば、こんなことにはならなかったのに……。判断能力が鈍った孝太郎は、執拗に電話をかけ、メールを送った。しかしそれでも、美咲からは自分のもとに戻ってくるような返信はついに得られなかった。

もはや失うものがなくなった孝太郎は、美咲だけはなんとかしても取り戻すと決断した。

翌週、孝太郎は一人、北海道に向かった。

住所が分からなかったの、かつて同じサークルだった絵里奈に連絡を取り、美咲にお詫びの手紙を書きたいと嘘をつき、住所を聞き出した。

「今も実家のお父さん、お母さんと一緒に住んでいるみたいだね」という絵里奈のメッセージに、思わず舌打ちをした。さすがにかつて婚約を破棄した男がいきなり押しかけたら、両親は良い顔をしないだろう。

新千歳空港から電車に乗り換え、美咲の住所の最寄り駅に着いた。

ここで美咲の帰ってくるのを待とう。

夕方、駅の様子が一望できるカフェに入り、窓際に腰を掛け、一杯のコーヒードリで粘りに粘った。今日会えなくてもいい。明日も明後日も俺には何も用などないんだ。いくらでも粘ってやる。

結局その日、22時まで待ったが、美咲は姿を現さなかった。もっと遅い時間まで仕事をしているのか。それとも、どこかに外泊しているのか。メールで確認してみようと思ったが、逆に怪しまれると思い、やめた。

この日は諦め、3つ離れた駅のビジネスホテルで夜を過ごした。まあいいだろう。明日だって明後日だって、会えるまで張り込み続けてやる。

翌日も夕方から同じカフェで待ち続けたが、やはり美咲は姿を現わさない。車で会社に行っているのか。それとも、どこか別のところで一人暮らしを始めたのかもしれない。

そう思いながら張り込んでいた3日目の金曜日、ついに事態が動いた。美咲が夜7時頃、駅の改札から出てきたのだ。急いで声をかけに行こうとしたが、孝太郎は踏みとどまった。

美咲の隣には男がいた。そして、二人してタクシーに乗って、駅を離れていった。

ようやく美咲を見つけた喜びと、隣に男がいた怒りがないまぜになった気持ちを、孝太郎は抱いた。恐らく、あの男と実家に行くのだろう。実家に行くということは、もしかして親も公認の相手なのかもしれない。

そう思うと、悔しさが募ったが、一方で、孝太郎には良案が思い浮かんだ。

孝太郎は急いで美咲にメールを打った。

「お前、今、男と一緒にいるだろう。婚約者か？俺は何だって分かっているんだぞ。もしそいつや両親に俺と年末一緒にいたことをバラされたくなかったら、そいつとは別れろ」
なかなか返事は来なかったが、2時間後、一本のメールがホテルにいる孝太郎のスマホに届いた。

「こっちに來ているのね。後で落ち着いたら電話するから話ししましょう」

美咲は、震える手を必死に抑えながら、なんとかメールを打ち、送信ボタンを押し、トイレから出てきた。

孝太郎が北海道に來ている。しかも、この周囲に……。元恋人とはいえ、今やストーカーまがいの、アルコール中毒を患った無職の大柄な中年男性。そういう意味では、雄太や両親に危害を加えても何ら不思議ではない状態だ。

しかも、雄太はどうやら顔を見られてしまったようだ。自分だけならまだしも、周りの人間に迷惑はかけられない。

リビングに戻った美咲は、努めて笑顔を作り、雄太と両親の待つ団らんに戻った。明日は土曜日なので、雄太はこの後、別室で泊まっていく予定になっている。

帰宅する必要のない雄太は、両親の勧めでビールをハイペースで楽しんでいる。それほど酒に強くない雄太のことだ。恐らくこの後は、別室でダウンしてしまうだろう。

それにしても両親の喜びように、美咲は、驚かされた。これまで10年間、がん罹患によって一時はすべてを失った長女が、男性を連れてきた。しかも、結婚を前提に付き合っているという。

孫にはお目にかかれないうとしても、親としてやはり子どもの幸せは嬉しいものなのだろう。美咲は、親孝行ができたような嬉しきを感じた。

とともに、孝太郎の影も気にせずにはいられなかった。雄太がダウンしたら、自室で電話をして、付きまといをやめてもらわなければ。

「美咲、どうしたんだ？ 君も飲みなよ」

「そうよ、せっかく雄太さん来てくれたんだから」

「うん、じゃあもうちょっとだけ……」

この幸せを失いたくない。美咲は、雄太に注がれたビールを一気に飲み干した。

案の定、雄太はそれから1時間ほどして、ソファにもたれかかったまま眠り始めてしまった。

「ここじゃ風邪ひくから、お部屋に行こう」

「うーん、すみません……。お義父さん、お義母さん、それではちょっとだけ失礼します」

美咲に促され、なんとか立ち上がり、雄太は2階の一室に向かった。かつて妹の部屋だったその一室は、今、来客用の宿泊部屋として機能している。ベッドに布団も敷いてあり、さも雄太が来るのを待ち構えていたようだ。

「雄太くん、お疲れ様。ここで寝ていていいからね」

「あれ、美咲、行っちゃうの？」

「だって、二人でここにいたら怪しまれるでしょう」

「……うーん、確かに……。一緒にいたいけど。でも、今日は寝るわ。おやすみ……」

雄太は、美咲にキスをして、別れを告げた。

「雄太くん、ありがとね。おやすみ」

美咲は、部屋の電気を消し、ドアを締めた。

雄太を介抱し終えた美咲は、自室に入り、スマホを取り出した。

孝太郎から、なるべく早く早く電話が欲しいという趣旨のメールが入っている。

美咲は、意を決して、孝太郎に電話をかける。

3コール目で孝太郎は出た。

「おう、遅かったな。待ってたよ」

「ゴメン、ちょっとバタバタしてて」

「さっきのメール、驚いただろう」

「何でこっちに來てるのよ」

別室に聞こえないよう、声のトーンを抑えながらも、しかし興奮は収まらない。

「何でって、お前に会いたいからに決まってるじゃないか。何度連絡しても電話に出ないし、メールもそっけないから、こうしてわざわざやってきたのさ」

「仕事が忙しくて。ごめんなさい」

「いいなー、仕事が忙しくて。俺なんて、やらせてもらう仕事もないんだからさ」

「ごめん、そういう意味で言ったんじゃない。でも、孝太郎くんの実力なら、どこに行っても通用するのに、何で……」

美咲は、できるだけ雄太や両親の話題にならないよう軌道修正を試みた。

「やっぱりアルコール中毒だったのがバレちゃってるんじゃないの。あとは、営業マネージャーやったのに、次の仕事も決めずに、急に無職になっちゃうのは不自然だからとか……」

「でも、それとこれとは本来別なはずでしょう」

「もうその話はいいんだよ！ お前が何言っても採用するほうがいらなくて言うんだからしょうがないだろ！」

孝太郎が声を荒げた。

「そんなことより、お前、最近あの男と付き合ってるんだな。だから電話にも出ないんだろ？」

「だとしたら何なの」

「いや、だからさ、俺のことを避けるんだったら、あいつに俺たちのことをバラしてもいいんだぜってこと」

「なんで彼氏でもないあなたにそこまでされなきゃならないの？」

「彼氏でもない男と年末に寝たのは誰だっけ？ 俺、あれからやっぱりお前じゃなきゃダメだって分かったんだよ。だからさあ、もう一度やり直したいんだよ」

「あなたは、子どもが産めなくなったから、同じ境遇の私と一緒にいたいだけなのよ。私を本当に求めているわけじゃないわ」

「そんなことはない。だとしたら、本気だということに分からせるために、今からお前の家に押しかけてもいいんだぜ」

「ちょっといい加減にして。警察呼ぶわよ」

「警察は事が起きてからじゃないと動かないからな。とにかく、俺は当分このあたりにいるから、俺と一緒にいるか、もしくは、あいつに俺とのこと伝えてもいいか、美咲が決めたら連絡くれ。じゃあな」

孝太郎はそう言い残して電話を切った。

美咲は、どうしていいか分からず、ベッドに顔を押し付け、泣いた。

翌日、まだ眠気が収まらない様子の雄太を、タクシーで駅まで送った。最寄り駅付近は孝太郎が潜んでいるかもしれないため、買い物があったと言って、少し離れた逆方向の駅を指定した。

「ごめんね、ちょっと遠くなるけど」

「全然。でも、美咲のご両親、良い人たちだな」

「有り難う。雄太くんだからきつと安心なのよ」

「でも、これでいよいよ結婚に向けて準備進められるな」

「……そうね。いよいよね」

「もちろん仕事もちゃんとやらなきゃな。美咲と幸せにやっていくためにも」

「うん、私もこれから先も仕事頑張らなきゃ」

雄太をホームで見送り、美咲は孝太郎にメールを打った。

「昨日の続きの話をしたいから、この後、駅前のカフェで落ち合いませんか？」

孝太郎からは即返事が来た。

「分かった。じゃあ、12時で」

電車に乗り、指定された時間にカフェに着くと、孝太郎は一番奥の目立たない席に腰を下ろしていた。

相変わずの無精髭とボサボサの頭。Tシャツはヨレヨレだし、いかにも安物のビーチサンダルを履いている。

「こんにちは」

「おう、待ってたよ。座りなよ」

「あまり時間ないの。今回ここに来た用件だけ教えて」

「それは昨日伝えたはずだぜ。俺と一緒にになるか、あいつに俺とのことバラしてもいいか……」

「どっちも嫌だって言ったら？」

「そもそもあいつとはどういう関係なんだ？」

「あなたには関係ない話よ」

「まあ、実家に連れて行くくらいだから、婚約者なんだろうな。それで間違いないな」

「想像にお任せするわ」

「まあ、いいよ。とにかく俺としてはお前と一緒に東京に来てくれればそれでいいんだ。それが一番お前にとってもベストなはずだ」

「なんであなたが勝手に決めるの？」

「だってあいつ、お前が子どもを産めないこと知らないんだろう。だったら、今は良くても、いずれ俺のときみたいに捨てられるだけじゃないか」

「ちゃんと伝えたわ」

「……えっ……」

「だから、ちゃんとそのことも伝えた上で付き合ってるの」

「嘘だろ。なんで……」

「もちろん私はじめは伝えるのに躊躇した。あなたるときみみたいに、またそれが原因でダメになるのかと思うと、不安で仕方なかった。でも、後になって捨てられるのは辛いから、最初に勇気を出して伝えたの。でも、彼は気にしないって言ってくれたわ」

「そんなの、嘘に決まってるだろ。何か考えがあるんだよ。それか俺みたいに種無しか…」

「世の中のすべての男性があなたと同じような考えじゃないのよ。胸も生理もなくなつて、ちゃんと女性として見てくれる男性だっているのよ」

「まあ、いい。だとしたら、なおさら去年の年末のことを言われたらまずいんじゃないか？」

「いいわよ、そのことも伝えて。それでフラレたらそれまでだったって思うから」

美咲は、腹をくくってそう告げた。もうここまで来たら怖くない。二股をかけたわけではないのだし、あとは雄太を信じるだけだ。

「その代わり、東京には絶対に行かないから。あと、何か私たちに危害を加えたら、すぐに警察を呼ぶわ」

「あー、そうかよ。分かったよ。じゃあ、あいつに会ったら伝えとくな。俺は暇人だから、いつまでだってこの土地に居続けてやる。それじゃあな」

そう言っただけで伝票を手には孝太郎は立ち去っていった。

どうしてこんなことになってしまったのか。孝太郎を立ち直らせるにはどうしたらいいのか。人は何もかも失うと、あんなに変わってしまうものなのか。

気丈に振る舞っていた分、美咲はドツと疲れが出て、しばらく椅子から腰を上げることができなかつた。

10

雄太は何か人の気配を感じていた。客先から会社に戻る途中、何となく付けられているような気がしていた。

信号を待っているとき、気づかれないようにチラッと振り向くと、10メートルほど後方にボサボサの頭で無精髭を蓄えた男が自分の方に近づいてくるのが分かった。知り合いではなさそうだ。

その男は、自分目にかけてズンズンとやってくる。そして、手を伸ばせば届きそうなるまでやってきて、雄太にこう告げた。

「美咲の彼氏だな？」

「だとしたら何なんですか？」

「俺は美咲の元婚約者だ。ちょっと話したい」

「……分かりました。ただ、一旦会社に戻ってミーティングに参加しなくちゃいけないんです。19時以降でも構いませんか？」

「分かった。じゃあ、店を指定してくれ。これが俺の連絡先だ。時間になったらそこへ行くから」

「分かりました。静かなところが良いですよね。このあたりならいくつか良いところ知ってますので、あとで連絡します」

そう言って、雄太は信号を渡り、会社に向かった。

雄太からメールが届いた。そこには、店の場所と時間、そして、富樫という名前で予約を取ったことが書かれていた。

孝太郎は雄太の律儀な姿に、意外な思いがした。急にやってきた元婚約者に対して、随分丁寧な奴だ。まあいい。あとでたつぷりと嫌な思いをさせてやる。

孝太郎は待ちきれず、指定された時間の10分前には店に到着した。

和風の小洒落た居酒屋で、小さいながらもすべて個室となっており、これなら深い話ができそうだと孝太郎はほくそ笑んだ。

時間ちようどになって、雄太は到着した。

「初瀬さん、お待たせしてすみません」

「いや、こっちが無理矢理誘ったんだから、気にしなくていいよ」

「すみません、失礼します」

「何飲む？」

「じゃあ、ビールで」

孝太郎は店員を呼び、ビール2つと伝えた。

酒が来るまで、孝太郎はひと言も喋らなかつた。雄太の顔をマジマジと見つめ、これから伝えることを考えていた。

ビールが届くと、とりあえず乾杯、と言って孝太郎は手に持ったジョッキを、雄太のジョッキに強く当てた。雄太のジョッキからビールの泡がこぼれ落ちた。

「悪い、悪い。勢い良かったかな」

「あつ、大丈夫ですよ」

「で、富樫くんさあ……」

「雄太で良いですよ」

「じゃあ、雄太くんさあ、単刀直入に聞くけど、美咲といつから付き合ってるの？」

「今年に入ってからですかね」

今年からか。孝太郎は少し残念に思った。もし去年からだったら、例の夜の件は相当堪えるはずだからだ。とはいえ、やはり自分の今の女が、元婚約者とはいえ、直近で関係を持っていたとなれば動揺するはずだ。ビールが進む。

「そうなんだ。あつ、店員さん、ビールおかわりね。で、どっちから告白したの？」

「僕からしました。年末に告白して、年が明けてからOKもらって付き合い始めたんです」

「なるほどね。でも、あいつの体のこと知ったときは驚いたろ？」

「僕たち同じ会社なんですけど、確かに最初に聞いたときは驚きました」

「いや、病気のことじゃなくてさ、他にも色々あるじゃん……」

「胸を切除したことや生理が来てないことですか？」

「そうそう。俺の場合、婚約中にそんなことになっちゃったから、ホントびっくりでさ。まあ、あいつが申し訳ないからって別れることになったんだけどな」

「そうだったんですね……。初瀬さんも大変でしたね」

「まあな。その後、別の女と結婚したんだけど、うまくいかなくなって今は独り身だよ」

「初瀬さんのことは、ちょっとだけ美咲から聞いていました。昔、婚約者がいたんだけど、自分のせいで辛い思いをさせてしまったって」

「美咲がそんなことを？」

「はい。自分と出会ってなければ、もっと良い人生を歩んでいた人だって言うてました」

「……へえ、それは知らなかったな。ところで、雄太くんは何で美咲を好きになったの？君なら他にいくらでもいるでしょ」

ビールが届き、孝太郎はまた勢い良くビールに口をつける。その様子を横目に見ながら、雄太は小さく口を開いた。

「初瀬さんは美咲の元婚約者の方ですし、美咲のことを一番知っている方だと思います。なので、今日は包み隠さずにお話ししますね……」

その数時間後、美咲は孝太郎から、一本のメールを受け取った。

「いろいろと悪かった。明日、東京に帰るよ。もう美咲たちにまわりつくようなことはしない。本当に悪かった」

美咲は、何のことだか全く分からなかった。

それから2ヶ月が過ぎたが、メールの内容の通り、孝太郎からは何も言うてこない。

雄太とは相変わらず仲良くやっている。最近では、結婚後の新居の話が中心だ。

雄太は母親を小さい頃事故で亡くし、父親とも今は連絡をしていないようなので、美咲の実家の近くで言うてくれている。

さらに、自分も美咲の両親ともっと仲良くしたいし……と嬉しいことを言うてくれる雄太は、本当に自分にはもったいないほどの男だ。この幸せがいつまで続くのだろうか。

その日、仕事が終わりと、自宅に戻ると、リビングのテーブルの上に自分宛の封筒が置いてあった。ひっくり返すと、「初瀬孝太郎」とある。

今度は何だ……美咲は不気味に思った。あのメール以降、何も言うてこないが、やはり気が変わり、何か美咲が嫌がるものを送りつけてきたのだろうか。

自室に戻り、恐る恐る封を開けると、文章でびっしりと埋め尽くされた便箋が何枚も入っていた。

折り目を広げ、一枚目からじつくりと目で追うと、そこには信じられない事実が書き込まれていた。

「今、この手紙は、引越し先のアパートで書いている。あの家は、今は売りに出している、もう時期買い手がつきそうだ。元々俺の名義で買ったものだが、まだまだローンも残っているし、売れたとしてもローンはすべてはなくなるまいだろうから、その分、今のアパートは築40年のオンボロだ。

でも、そのオンボロアパートを紹介してくれた小さな不動産屋から、うちに来ないかと誘ってもらい、来月からそこで働くことになった。わずか5名の小さな会社だし、給料も前の半分くらいになりそうだけど、今の俺にはちょうどいいかもしれない。

さて、この前はいろいろと迷惑をかけて申し訳なかった。心から反省している。生殖能力を失い、元妻に捨てられ、仕事にも見放され、酒浸りの毎日の中、俺はどうかしていたよ。頼れる人も甘えられる人もいない俺は、美咲なら俺の気持ちを分かってくれればと過信していた。そして、美咲なら必ず戻ってきてくれると思った。あれから10年も経っていないのに、心のどこかで美咲のことを見下していたのかもしれない。他にいくところなんてないはずだと。

だから、雄太くんの存在が疎ましかった。そんなお人好しな奴がいるはずがない。何か理由があるはずだと。

それを突き止めるため、俺は美咲と話した日の後、しばらく札幌近辺に居座り、雄太くんに接触したんだ」

美咲は、全く知らなかった。雄太はそんなことひと言も言わなかった。

便箋をめくる手が汗でびっしょりになる。

「彼とは、市内の居酒屋で2時間ほど話をした。最初はどこかであの日の夜のことをぶちまけてやろうと思っていた。あのときの俺はささくれだっていたし、この先どうなってもいいと自暴自棄になっていたから。正直、二人の仲を壊してやろうと思っていたんだ。

でも、雄太くんの話を聞き、そんな思いは吹き飛んでしまった。

美咲にもまだ言っていないって言ってたけど、でも美咲に言うなどは言われてないので、その事実をここに書きます。なぜなら、彼が自分の口で言うとは思えないし、でも美咲はやっばり知っておくべきだと思うから」

どんな真実が待っているのか。美咲は、便箋をめくるのが怖くなった。しかし、目をそらしてはいけない。真実を確かめよう。

「雄太くんは、『なんで美咲を選んだのか』と聞いたんだ。そうしたら彼は俺を信用して話してくれた。

彼の両親のこと、美咲には、母親は小さい頃に事故で亡くなって、父親とは今は連絡を取ってないと伝えていると思うけど、本当はちよつと違うんだ。

まず彼の母親は、事故死じゃなく、病気で亡くなった。しかも、病名は「乳がん」。さらには、発覚時に彼を妊娠していて、治療を遅らせてでも彼を産むことを選んだらしい。その後、彼は無事に産まれたけれど、治療が遅れた影響もあり半年後に亡くなったんだ。

そして、その事実は、彼自身にもきちんと伝えられず、母親は事故で死んだとずっと信じていたそうだ。

その後、父親に育てられた雄太くんは、普段は優しいのに、お酒が入ると急に暴力的になる父親にずっと怯えながら暮らしていたらしい。

でも、仕方ないよな。母親がいないわけだし、父親に付いていくしかないんだから。

そして、高校1年生のとき、友人とのスノーボードから帰ってきた雄太くんは、酒を飲んでいた父親がまた絡んできたらしい。せっかく休日を楽しんできたのに、気分を害した雄太くんは、『なんでそんなに俺に当たってくるんだよ!』と父親に歯向かったらしい。その頃は、体も父親と同じくらいになって、自信がついていたんだろうね。でも、それが余計に父親を苛立たせたようで、彼は雄太くんについていたんだろうね。『俺がお前に強く当たるのは、お前が美奈子を奪ったからだよ!!』と。母親が亡くなったのは、自分を産んだから、ということ。15歳の彼は初めて知らされたというわけだ。

父親は当時、母親の治療を優先すべきだと譲らなかつたらしい。でも、母親のほうが、『どうしてもこの子を産みたい。産んだ後、すぐに治療して絶対に元気になるから』と言って父親を説得したらしいんだ。だから、父親にとっては、普段はかわいい息子でも、一人酒を飲んで寂しくなると、雄太くんが母親を奪った男に見えてしまったそうさ。

美咲は、何も知らなかつた。雄太のことを何も……。

「真実を知らされた雄太少年は、あまりのショックに、家出をしたらしい。自分のせいで母親を死なせてしまい、そのせいで父親を苦しめている。そんな自分がノウノウと生きている資格があるのかと。気づいたら、川べりで自殺未遂を図っていたそうさ。

幸い、通行人に助けられ、一命は取り留めたものの、父親とは一層冷え切った状態になつたらしい。

どうしても父親と離れたかつた雄太少年は、必死に勉強し、仙台にある私立大学に合格。家を出て、奨学金を借りながら、卒業まで漕ぎ着けたそうさ。ただ、結構な額の奨学金だったらしく、返し切るのに10年くらいかかり、美咲と付き合う1年前くらいによく返し終わつたらしい」

確かに、美咲と付き合う前の雄太は、仕事はできるし、人気もあったが、年齢の割にどこか落ち着きすぎている印象があった。だから、美咲は、彼から声をかけられたとき、意外に思ったものだ。その裏にはそんな理由があったのか。

「そして、美咲を選んだ理由にたどり着くわけだけど、母親と同じ病気に罹患しながらも、そのことに甘えず一生懸命に働いている美咲の姿にずっと、顔も知らない母親の姿を重ねていたらしい。奨学金を返し終わるまでは、自分を律していたそうだが、返済後はどうにかして、美咲ともっと距離を縮めたいと思ってた。そんなとき、休日出勤をきっかけに接点ができた。ここから先は美咲も知っている通りだ。

一緒にいれば一緒にいるほど、美咲のことが愛おしくなったらしい。最初は母親を重ねてみることもあったようだが、段々と美咲を守ることそのものが自分の生まれた使命だと感じるようになったそうだ。最近、ご両親に対しても同じ思いを抱いているとも言っていた。

ここまで話を聞いて、俺は涙が止まらなくなった。ああ、コイツには敵わないなど。自分の寂しさや喪失感を紛らわすために美咲を求めていた俺と、美咲を守ることに命をかけている雄太くん。そんな男から、美咲を奪えるわけがない。俺が帰京したのはそういうやり取りがあったからなんだ」

美咲の頬から涙が落ち、封筒を濡らした。便箋はあと一枚になった。

「でも、安心してくれ。雄太くんの話を聞いて、俺は改心した。たとえこの先辛いことがあってももう逃げない。そして、いつか誰かを守るような男になれるよう、もう一度頑張ってみるよ。

だから美咲も、雄太くんのことを守ってやれよ。まだ父親とは絶縁状態みたいだけど、美咲と美咲のご両親とで彼を支えてあげてほしい。

俺が伝えたいのはここまでだ。

最後に一つだけ。美咲、幸せになつてな。今まで有り難う。孝太郎」

読み終えた美咲は、大きく2回ほど深呼吸をすると、スマホを取り出し、雄太にLINEのメッセージを打った。

「雄太くん、次の週末、またうちに来ない？ みんなで一緒に鍋しようよ。雄太くんはまたすぐ酔っ払うだろうから、うちに泊まって、次の日は二人の新居を探しに行こう」

送信ボタンを押した美咲の頬に、涙はもう見えなかった。

(了)

※本物語は、すべてフィクションです。

※本物語は、テーマ性をより重視する観点から、2023年現在の健康保険制度や医療情報等とは異なる記述が含まれています。